奉寄
詩歌
改正月令博物筌 七月部 一

二
529
9

詩歌連俳

季寄註解

改正月令博物筌

秋之部

改正月令博物筌　凡例

○此書ハ先ヲ行ハ貝原先生述作の歳時の増補ふて洞齋公翁三十年前編輯し諸先生の訂正を乞て春之部夏之部既ふ世ふ流布をしかも艸稿駁雜ふして傳寫の誤もあり且時務ふ後ゝ事少ゝ比たゝへ神支ふ於ゝ洛東の新日吉四月の祭祀五月と改ゝれハ幡の安居頭今十二月ふのゝ行ゝ其外歳事の故事又ハ世俗のいゝゝむ一ゝせの内の嘉例ゝどゝゝ物ふも變ゝる事多ゝ今般委ゝく改正ゝ口ふ録とな

処の諸家の校閲を経て板行を
故ふ改正の二字を蒙らしむ春夏
の部も此度正して是又改正の
二字を附を依て改正月令博物
筌くりのい究めて正しく誤
此昏の正しくなりと誉めて
詩哥俳諧等給ひ故ふ記し侍る
○春夏の部ハ神社祭礼細字ふ
昏ぢる多もあれども秋冬の部ふ至
ていさるべき祭礼又ハ世ふふるく聞
へるハ皆大字ふ書を居ハ見
易かりんが為なり
○巻毎の初ふ圓形の内ふ昏さ
ハ見易かりん為ふ設ゆるそ

七月部目録

△印ハ俳諧の季とりの物へ

○養生の法○雨風の考○米の豊凶
○妙茶○季とりの祭○其外人家
重宝のこと処々ふ数多あるる
ゆへ目録ふ入れをるさず

秋

○秋の旺る処○秋由来 発端ノ
○秋の異名 并ニ註解 一丁

七月

卦 月支 調子 陰陽生 七丁
並ニ註 七月異名並ニ註 一丁

日令

此部ふハ七月一ヶ月日の定り
ふる事支の定りふること記す

△立秋節 二葉七ノ 柳散 三丁
△處暑中 七ノ三候七ノ 六丁

朔日
○先天節 七丁
六日
△洗車雨 八丁
七日
△硯洗 △机洗 七丁
△山城北野煤拂 八丁
△七日節供 七丁
△索餅 七丁
△洒涙雨 七丁
△七夕 異名 七丁 詩哥七十四丁

△二星 △星合 △曬衣夕 △巧夕 △乞巧
夕 △星夕 △星會 △乞巧奠 △犬飼星
△男七夕 △女七夕 △七夕七姫 △とり一妻
△七箇池 △百ヶ池 △乞巧針 △占蛛絲

△乳の糸△星の手向△庭の立琴△七夕ふ
借を△水ゑ神△梶の葉△星契△星
迎△年の渡り△妻むく舟△妻こ
ー舟△七種舟△天の川。異名 和名
△秋さり衣△紅葉のもみ
△かさぎのもみ

○七夕之文 七ノ十九丁

△京都北野御手水 七ノ十九丁
△本願寺篭花 七ノ廿一丁
△京都文珠會 七ノ廿一丁
△模賣△迎鐘
△模買人
△魂迎△迎火 七ノ廿三丁
△盂蘭盆△盆會△盆供
△盆△施餓鬼 七ノ廿四丁
△靈祭△聖灵祭△聖灵棚△灵棚 七ノ廿五丁
△棚経 其外供物
△嵐尾草△水ゑ中 七ノ廿五丁
△生身玉△荷の仮 七ノ廿六丁
△解夏 夏昏納 七ノ廿六丁
△池坊立花 七ノ十九丁
△七夕祓△七日祓 七ノ十九丁
△逆峯入 七ノ廿一丁
△六道參 七ノ廿一丁
△清水千日參 七ノ廿五丁
△中元 七ノ廿四丁
△差精 七ノ廿六丁
△墓參 七ノ廿六丁
△解、夏艸 七ノ廿六丁

十五日
△安居頭 七ノ廿七丁
△三井寺女詣 七ノ廿七丁
十六日
△水灯會 七ノ廿七丁
△施火△大文字火
△妙法火
△送火 七ノ廿七丁
△丹形火 七ノ廿七丁
△井火 七ノ廿七丁
△經木流 七ノ廿八丁
△祭 七ノ廿八丁
△酸广
十六日
△新綿 七ノ廿八丁
△松崎題目踊 七ノ廿八丁
△つと入 七ノ廿八丁
△雙塲出 七ノ廿九丁
十七日
△宗祇忌 七ノ廿丁
△京都御灵御出 七ノ廿丁
△地蔵祭 七ノ廿丁
十四日
△文覚上人忌 七ノ廿丁
△愛宕火 七ノ廿丁
△夢山別 七ノ廿丁
△信州御射山穂家作御神事 七ノ廿丁
十七日

月令

此部ハ八日のさぶ〜ぐる七月一ケ月のこと〜〜しるる

△摂待△門祭 七ノ廿二丁
△燈篭△高燈篭 ハきうこ燈篭
△きうこ△舟どうろ△花どうろ△折 七ノ廿二丁
ゑけ燈篭△廻りどうろ△軒のどうろ
△踊 七ノ廿二丁
△花火 七ノ廿二丁

△秋の扇 △扇おく △閑ふく 七ノ卅二丁
△扇をとる △団をとる
△京都六斎念佛 七ノ卅二丁
△相撲節會 七ノ卅三丁
△こゝろ使 △もゝ〻角力
△辻をもうす

時令

この部ふハ七月一ヶ月時候かゝるこゝ紙あゝ色〻もの

△初秋 七ノ卅三丁 △残暑 △のこる暑さ 七ノ卅四丁
△餞暑 七ノ卅五丁 △稲妻 七ノ卅五丁
△秋の初風 七ノ卅六丁 △秋涼 △新涼 七ノ卅六丁
△初嵐 △初暴風 七ノ卅六丁 △冷〻 七ノ卅七丁
△二百十日 七ノ卅七丁

草木

△萩 △糸萩 △白萩 △小萩 △藪の萩 △秋ゆくの萩 七ノ卅八丁
△楓 △青楓 七ノ卅八丁 △撫子 七ノ卅九丁
△柞 七ノ卅九丁 △檀 七ノ卅九丁
△櫨 七ノ卅九丁 △木槿 七ノ四十丁
△朝貞 七ノ四十丁 △秋海棠 七ノ四十丁
△玄及 七ノ四十丁 △桔梗 △ちうこう 七ノ四十丁
△沢桔梗 七ノ四十丁 △蘭 七ノ四十丁
△建蘭 七ノ四十丁 △女郎花 七ノ四十一丁
△茶の花 七ノ四十一丁 △仙翁花 七ノ四十一丁
△観音草 七ノ四十一丁 △翁草 七ノ四十一丁
△弟切草 七ノ四十一丁 △益母草 七ノ四十一丁
△鳳仙花 七ノ四十一丁 △旋覆花 七ノ四十一丁
△野菊 七ノ四十一丁 △やいと花 七ノ四十一丁
△曼珠沙花 七ノ四十一丁 △常山花 七ノ四十一丁
△頼桐 七ノ四十一丁 △蓖麻子 七ノ四十一丁
△渋柿 七ノ四十一丁 △茗荷花 七ノ四十一丁
△尉金花 七ノ四十一丁 △薏苡 七ノ四十一丁
△蒲萄 七ノ四十一丁 △紫葛 七ノ四十一丁
△桃子 七ノ四十一丁 △木瓜実 七ノ四十一丁

△槐花 四七ノ
△刀豆 四八ノ
△青瓢草 四八ノ
△いのこと 四九ノ
△粟の穂 四九ノ
△稲の花 △富士花 五十ノ
△室の早稲 五十ノ
△鳥屋勝 五一ノ
△秋の蛙 五二ノ
△秋の蚊 △蒲蚊 △蚊 五三ノ
△秋の蟬 五三ノ
△蓮子飛 四八ノ
△夕負実 四八ノ
△西瓜 四八ノ
△束 四九ノ
△稲葉の雲 五十ノ
△早稲 △早田の稲 五十ノ
△荒魚 五一ノ
△鳶吹 五一ノ
△秋の蠅 五二ノ
△秋の蛍 五二ノ
△蛁蟟 五三ノ

生類

七月の生あのと集ひとゝ八月又九月かも用ゆる物

△初鷹 △小けつ 鷹 △初鷹 鷹 五十ノ
△鷹打 五一ノ
△菊 五一ノ
△鷹吹 五一ノ
△荒魚 五一ノ
△秋の蛍 五二ノ
△秋の蠅 五二ノ
△蛁蟟 五三ノ
△菊蟲 五三ノ
△田畑虫送 五七ノ
△赤卒 △赤ゝ 五三ノ
△虫撰 五六ノ
△虫尽 五六ノ
△虫賣 五七ノ
△月鈴虫 五七ノ
△蟋蟀 五七ノ
△蚣蝑 五八ノ
△稲虫 五八ノ
△樵虫 五八ノ
△馬追虫 五九ノ
△藻鳴虫 △藻の住家の音 五十九ノ
△蟷螂 五九ノ
△蜻蛉 △キヤン〳〵 △アキツ 五十ノ
△蟲 △虫の音 △虫の声 五十四ノ
△虫合 五十八ノ
△虫籠 五六ノ
△轟虫 五六ノ
△松虫 五六ノ
△促織 五七ノ
△竈馬 五八ノ
△阜蚕 五八ノ
△蓑虫鳴 五八ノ
△稲つき 五九ノ
△蚯蚓鳴 五九ノ
△常山虫 六十ノ
△菊蟲 五一ノ
△寒蟬 五三ノ
△秋の蝉 五三ノ

必用

七月一ケ月○養生○天気○衣服の式等要用のこと〻しるす

○楽事　七十五

破軍向方　七十五

○日刻　七十五

方角　七十五

○天気占候　七十五

衣服の式　七十五

○萩かさゝ

○花もくき

○女の衣服　七十五

○養生　七十五

飲食

七月一ケ月の食物一切料理ちん立等をしるす

○焼米　七十五

△切麥　△あつ麦　七十五

七月料理献立　七料ノ一丁

月令博物筌秋之部發端

死を内に含るハ秋の気の旺なるなり

礼記の註に曰秋と小陰と寸其気収成

月四陰に至れハ陰と寸盛ん陽れくろへ陰さえ多と以て秋と寸人陽れと以て老と寸者この ゆへ秋ハ養生を貴くこと以て時令に順ふ〻べし

秋由來

漢書律暦志に曰秋ハ揫物揫斂して成熟をる也しいへり揫斂ハおさめるしいふ義なり○和語にあゝく訓ぶる事ハ陽氣去りて天色さえあらゝかなりしいへしと又一説に秋ハ緋しいへ心なり草木の葉ハあかくなり木の実も色づくゆへしいへり

○方と西とをもつる事ハ礼記に秋を西郊にむかふとあり易通

統圖ニ日西方の白道をゆくなれと西陸といふと共ニ見えたり

和歌ニ秋の方角を西とよみたる例は古今集藤原勝臣の歌に

哥　おなじ枝とおもへどもあきのうつろふは西ちかき枝のもみぢなりけり

とよめり○精は白虎には淮南子にその獸は白虎とあり○人は義なりには淮南子ニ秋と矩とは方物をたゞしくするを義は成なり成は方圓物の角あるかたちにして人ニ於ては義のある心なり○天は昊天には元帝纂要ニ天を昊天といふと有て註ニ昊は愍なり万物の彫零をそこなひ愍むなりと見えたり○卦は兌には易ニ兌は正秋也とあるふとなり○圓の上○臟は肺には人身の肺を五臟の花蓋にして上ニ居て金属なるゆゑ故ニ秋ニ配當をはよりて医昏ニ見えたり○色は白には礼記ニ其帝は少皞とありて註ニ少皞は白精の君金天氏なりと見えたり○味は辛には礼記ニ其味は辛し其臭は腥し辛にして有て註ニ辛腥はうるゝ金ニ属なるゆゑなり見えたり

秋異名

白藏○素商○秋手○歛○金德○短晷○商飈○五政○木落○陰中○金勁○西顥○金行○士感○菊時○蓐秋○爽籟○少皞○收成○金商○朗景○明景

異名註

白藏といふは白は秋の金色藏は收藏なり爾雅ニ出

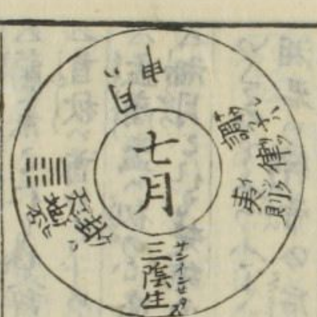
○素商といふは素は白なり商は秋の律なり○素秋も此理なり元帝纂要ニ出

○秋季歛はおさめなり○金德は盛德在金と月令ニあり○短晷は

ゥ父日陰ハ○商應ハ潘安仁カ詩ニ出
○五政ハ管子ニ出一曰博塞ヲ禁ジ二
曰五兵ノ双ヲ見ル事ヲ禁ジ三曰旅
農ヲ慎ミ聚收ヲ趨ベシ四曰缺
ヲ補ヒ折ヲ収ム塞ゲ五曰墻垣
ヲ修メ門閭ヲ周ハセヨ已上五政ハ
○木落ハ木葉落ル〻ハ楚辭出○陰
中ハ前漢書律曆志有○金勁ハ呉淑
ガ秋賦ニ金気方勁シトアリ○西灝
ハ前漢書郊祀志ニ出ル○金行ハ德
さくふ行ル〻ハ○士感ハ文
夫秋ニ感ズトハ諺ニヨル〻○
菊時ハ時ヲ得ル○蓐収ハ
つまり収ル〻ハ○爽籟ハ秋ノ帝ニ配ス
る秋の声ハ○少皞ハ秋の帝ニ配ス
己上元帝纂要ニアリ○収成ハ秋ニ
ゆるく○金商ハ金ハ秋の德商ハ秋
ゥ○朗景○明景ハ秋の景色ハ
○右の外秋三月ニ渡ル季ノ物
ハ別ニ三秋の部アリ

七月之部

△此印の分是ハ七月諸の季寄ニ用ヒ来ル物ハ



三陰生ルトハ秋ハ陰の初ル故ニ孟秋ニ於テ天地初クテ肅サトハ肅ハリノ〻ちぢまる心人身ヲ
ちしひぎ月ハ

○律ヲ夷則トハ夷ハ傷ル〻万物
始テ傷ル天刑ヲカンムル〻前漢書出
○卦ハ天地否トハ夏の三陽下ニ
上ニアリ秋の三陰下ニアリ象

七月異名

△孟秋礼記出△上秋韻府出
△孝秋纂要△首秋龍府
△新秋韻府△卓秋同△蘭秋事物異名
△閑秋同△蘭景同△相月△孟
商同△夷則月同△相月留青来珍
△蘭月同○相秋同△秋初同△商
節韻府△爽節同流火同△初
秋纂要△盆秋△涼月同昏ニ出

和名　△文月　奥義抄　△ふ月　同　めであひ
月　秘蔵抄　なつのよ月　莫傳抄
△あさ〻ゑ〻月　藏玉　七夕月　同
ふみ〻き月　同　あきと月　莫傳

異名註字　△孟秋　こゝに孟はそめと云
の中なれ七月は上ふなつ月ゑ
△孟秋　孟はいとめしいふ義ゑ
△蘭秋　楚辭出　秋蘭と紐て佩と
こゝにあるにこゝろ
△開秋　開はひらくと云義ゑて
もゝ花て秋ふゑる月といふ心ゑ
△蘭景　これも楚辭の秋蘭の故事
△首秋　首はこゝめしいふ義ゑ
△孟商　孟は初の心商は秋の義ゑ
△湘月　これも楚辭ふ此月湘君を
いつくみまつらふとあるゆへゑ
湘君は舜帝の后ゑ
△夷則月　夷則は律の名ゑ只註ゑ
△盆秋　此月盂蘭盆會とゑゆへ

△涼月　礼記月令ふ孟秋の月涼
風至るといふゑよりて名ぢく

和名註　文月　こゝに七夕ふ借をもて色
々の文ぐゝをひらくゆへ文
ひらき月といふを畧して文月ともふ
月ともいふへきそ　奥儀抄に出
○ふ月　こゝ月を約めていふゑ
○めであひ月　こゝ牽牛織女をめ
ひふ愛あふ月といふもこゝろ
○なつよ月　こゝに七夕のこと侍ゑ
△とみなへし　月下ふゑる寸哥にて
そのこゝろほのぼのとふ見えこゝろ
○ふゝひゝ月　こゝ七夕ふかすゝて
昏物をもゝ〻こゝろ
○あさゝ月　こゝふ秋の初を約て云

(三五)　秘藏　めであひ月
七夕はそゝくあひ月約えては
いとふんのうれしかるへん

藏玉　七夕月　家隆
物のゑうちのこゝろ

七月のこころまちうた

△ふみひろき月

七夕の重ふ夜はをのかゆくえをかくるゝ〜へるる久ひさき月

莫傳　秋和月

風ゆくゝ行とうつくしむ秋の和月とおもふふるしき

藏玉　ところゝ〜月

七夕の光りはをふかくくやとゝ名ゝとゝ〜しもとゝ〜月

立秋　節の名○七十二候○草木十二候○晝夜長短○日の出入等左の記を△

○涼風至る此天地の仁気散じて殺伐の気おこる也○蔡もかとひきて赤くなるなり

○白露降る秋の陰氣夏の陽氣に乗じて気候まどろる也

礼記の註に見えたり

○玉露花を催ふこと甚だ極く大

○寒蟬鳴ふ暑中に生しる蟬の聲に変ずるなり

○紫微月を侵ふこと紫微星とゝ月位の月にうがくとゝ

立秋　七月の節入然るに和哥連歌ふ七月朔日入

○初秋の秋立て三五日はてゝ夏よりもべ〜ゝ奥の時分の外ゝ

ゝるを初秋の題ふ立秋の心とよむ〜立秋の題ふ初秋の

(三)　夫木　立秋

定家

夫木

後鳥羽院

亀山　立秋朝　御製

千首　立秋風　為尹

同　立秋暁　師継

千載　社頭立秋　重政

同　立秋

連　秋の夕の月　直正

詩　立秋五字對句　同上

詩　立秋七字對句

入夜鐘声竹外聞　夜来秋

三入ハ至ノ字ヲ涼シクスルキ三入ハ秋ニ到ルモノ

詩　立秋詞　明　龔最

烟雲黯淡仲宣樓　往事年花

逝水流　ヒレクナツタノヲタカトノ人上

客ト吧ニサカモリレタソノタカトノヲ仲

宣ガ楼トイフ故事ナリ○往事トウ

マリ七月日ハ三ヒクドユクミフノナガレノ

ヤカナモノヤ　白雲郷山千里外　満

城風雨又新秋　カレラノレラガニナル

モヘタテ、タビノ人ニテ故郷ヲ千里

外ノ城外一面ニモノスゴイ　アメカゼガヨ

コルトオモヘハコトモ又

ハウアキニナツタノヒヤ

立秋　載秋葉　唐ニ女童秋ノ葉

故事　ヲ色々ニ切ナシテ花

ノカタチヲナシ今日カザレニイタ、ク也

日本ニテ柳ヲカケ菖蒲ヲ鬢ニ

クニヒトシ　夢華録ニ出ル

○日本ニモコノ事往昔アリシトゾ

立秋　一葉　一葉知秋　管言故事ニ出

故事　一葉トハ桐ノ事ナリ

△桐の一葉　△一葉散　△桐の葉落る

右ハ皆モ桐ノ事ナリ

○淮南子ニ曰梧桐一葉落天下

知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

○程明道ノ詩ニモ

詩　井梧一葉報秋聲トモ作レリ

○道甲昏ニ曰梧桐立秋ノ日一

葉先ヅ落トモイヘリ

(二分)　夫木　國夏

ウツロクハ紅葉風ふやまゝ　なの

岡辺ハ　ちるハ　ちるハ　ちるハ　ちるハ

連　本朝月令ニ曰月の秋ニ入ル宗牧

風ヲ　ちるハ　ちるハ　ちるハ　ちるハ　秋の一葉ハ知ル

能　あ　ち　つ　ち　隅　ち　ち　桐一葉　秋竹

狂　涼しさ　紅葉　ちて　ちる　文月ハ

風の一葉のちりしおるり　貞徳

立秋　一葉舟　小補韻會ニ黄帝

故事　浮葉ヲ見テ舟ヲ

ツクルト云故事トロニシルス淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリトイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

(兮)　廣沢の長苓々七夕の歌

天の川星ぬきやしの妹風よ
ちりや一葉のつ万むりへ舟

(俳)　恋の象て造ニ一葉や啓歌舟直正

立秋　故支　柳散　此ゴロチリソムル故ニ柳桐ノ類ハ早クチリ初ルナリ○事文類聚ニ晋ノ顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望秋先零ト云フ語ヲイダセリコノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋　故支　一葉衣　是ハ口ノ一葉ノ故事ニ一重ノ衣ヲ取アハセタルモノナリ○右一葉の事ようつるとも立秋一日ふかぞろ〳〵にもあべ初秋の事にようそも然こべ〜

立秋　天氣　立秋より北ノ風こそきて東稲ノ実入らす○又蒸あつれハ秋収よろし〜かゝべ○夜ひやかゝれハ大風なし〜これを夜北と云なり昼あつく殘暑つよく夜ふけてそこし〜夜北吹ハ虫けなく稲ひて日和よく虫けなく稲ふ大こえよし〜○南風にくわめたあつさハ雨ふる○秋季ハくもおゝし〜多く出ても風出さきハあめふ〜べ○朝ごとにひゞけ方赤々こけりくやけきハ陽気のさくんなるさう南へ赤〜ゆくそれがたをひて日和は○朝天雲のやけるハ二三日のうちふ雨ふる○夕やけ北へまハれハ雨ふるようし〜南へまはれハ雨なりちやく遅ちも又雨なう○朝の虹ハ西ノ見ハ三日の内う

雨ふり暮のあがいひぐれにあ
ま晴ふる○朝夕くもにあがの
真直ふるがかく立と虹と俗
ふりかまくに大風ふるのめく

立秋 **雲氣** 白雲東南の方より出て空ふきぬき出るバ大
風ふるこの風を伊勢東風と云
○西の方より東のかくへ行くハ
西南西北くふる日和よく○黒
雲天の川とゆきぬ風雨あるく

(三) 千首　初秋雲　爲尹

あれのゆくひのうきやれ雲
あれのゆくひのうきやれ雲

(能) 足巻と鶴よりかく秋のもし季吟

立秋 **妙藥** 立秋の日西ふむりひて
赤小豆十七粒或十四粒
を井花水にて呑ハ秋中赤白痢
病とるべくふ事なし

處暑 中名七十二候。草木七十二候
○昼夜長短○日の出入左ニ記す

節ようの十六日
を處暑
くなる
暑気
己ふ
潛
處る
とりて
處暑
名つく

△鷹鳥を祭るハ殺伐の秋氣を得
て鳥を捕ふ沢の四面ふるくに置ハ
祭をするふ似くう是を鳥を祭る
しいふ瀬の魚を祭ふなるト
△木槿朗栄をくふむくげの花咲
尽くを催しにて菓子もちげる
をいく△天地始肅ハ天地の気秋
ふうりてらで老てもるとく
△蓼花紅ハたでの花さくしも也
△農乃登穀とハ此月農人の五穀
の初穂を天子へ奉るく是
ふうりて天子新と嘗むと礼記

見えそう本朝新嘗會も是ふるう
○菱花肉実をハ乾実でなるう

日令

此部ハ七月一ケ月日の定りなること支の定りなること記す

朔日　今日風雨あれい米の價貴し
○南風あれい米粟大ふよし

先天節

今日聖祖降誕の日ゝ依て名つく事物異名集出

朔日　江戸　○本所羅漢寺五百羅漢供養施餓鬼あり

朔日　信濃　○下諏訪明神秋の宮祭り委しくハ年中行司綱目ふ出す

三日　京都　○鳥羽院御證月御忌今日ゝ竹田村安樂壽院ふて行ふ

四日　伊勢　○栢流しの神事。栢ハ云昔ハ土貢島ようハ栢と棒げそう神事ハ風の宮ゝて行ハる栢の浮んで流るゝ時ハその年豊年ゝ栢の沈むとき凶年ゝ

(秀)ふふこゝゝ山ふふゝそ半のむひろきあゝを寂阿ふゝゝそ半のむひろきあゝを寂阿

五日　京都　○建仁寺開山忌。諱ハ栄西千光國師葉上坊僧正ゝ云

六日　○高臺寺施餓鬼什物出る。四条二条河原七夕手向の笹流し

六日　洗車雨　六月ふ降る雨ゝ云七夕の車ゝ洗ふゝ云事ゝ歳時雜記見そう又日本歳時記ふも委しく出る

六日　硯洗　△机洗。京師の児女今日硯机ゝ洗ひ清め筆の業の露ゝ硯の業ゝ七夕の手向の詩哥ゝ昏ゝ供ゝる

六日　山城北野煤拂　北野天神の社今日内陣ふ納める神宝ゝ外ゝ出ゝて虫干ゝ其間ゝ内外の陣の煤ゝひゝ

○諸寺北野御手水六日ゝ煤ゝひ七日ゝ

七日　○西南の風を金風といふ米実少し　○雨ふれば八月ふ洪水あり但し小麦・麻・豆のふ価やすし

七日節供

今日内膳司より当日の節の供御を献ずべて供御は毎日奉る物なれども一年の内節々奉ると節供といふなり

○七は少陽不変の数なり故ふ当七日は本朝五節句の一にて祝ふこと日本紀江次第公事根源等其外諸書ふ出て歴然たる式日なり俗二星の祭りふかこと公事の式日なることを忘れざるふ似たり

索餅

昔高辛氏の小子今日死す昊鬼となり人をやまず常に麦餅を好むこれふよりてこの麦餅を供じて瘧疾をまぬかるるよしふ十節紀ふ出たり今日の節句は瘧を除く為也といふ此ゆへや今日親族索麺を食ふなり

索餅といふ索麺のことなり麦索ともいふ風俗考ふ出たり

生花式

撫子・桔梗・槿・萩・葛・尾花・ときわかつ

七日　△洒涙雨　七夕の雨をいふ牽牛と織女と別るるを悲しみてなるみぞをそそぐその雨なるよし唐土にてなるくいたりなるくいたり秉燭くい串文類聚天中記等ふ出たり

七日　△七夕　△二星　△星合　△曝衣夕　△巧夕　△乞願夕　△星夕　△星會　△乞巧奠

△男女七夕異名　牽牛星経　河鼓ふ雅　牛郎子平大全　牛星晋公洛禄

日和名　△彦星和名抄　△犬飼星日

牛ひく日〜歌抄△男七夕

△七夕異名　織女　星姥　詩学大成　天孫　柳文　天姥　同上　△天帝　宋詩選

日和名　たなばたづめ　古今集△こと〜ものし

○七夕七姫〜つゝ

△朝食姫△梶の葉姫△百子姫

△薫物姫△さゝがに姫△秋露姫

△糸織姫　已上を七夕乃七姫と

いつゝ草に出そう

○又七夕七姫の一説なり。棧姫。梶の葉姫。秋天姫。琴寄姫。灯姫

○糸織姫。篠虫　已上抽中集の説

○諺苛い名数和苛選といふる昏

ふ出るゆへ暑之右名数和苛選い云

と多くあれ共苛のこゝ為とい

絵ふあ〜ひよくこゝろるやうに秘

受口傳とのもとる故初学の人を

見て大ふ便らふ昏なり

○七夕祭と乞巧奠といふこれ巧い

たゝこゝよりて女の手ゝその器用

ふるゝやうに乞ひいのる事なり奠

ハまつりこゝろむ字なり日本こてい

天平勝宝七年ゝ禁裏にて初

て行ふる先御殿の前ふ白木の几

と立て〜立琴〜て十三絃の箏と

呂と律の調子ふ合して拍とそ

瓜菓の類とそ〜べ竿のそれ五

色の糸とうけつ〜れたらふる水と

たゝへて二星の影とうつ〜香花

そもそるへ祭らるゝよ〜　江家

次第にも委〜く記されそう

○唐土ふも此夕ハ婦人あつまりて

五綵の糸と以て星の影ふむひ

て七つの針のこゝ穴とそ〜　庭訓

瓜ゝざりのとそ〜るへて巧と乞祈る

ふ蜘蛛ゝ糸ゝそ

上さそうこゝ

人ゝ〜とする上

○今世今日児女子竹の枝ふ短尺と　荊楚歳時記見そう

たくさい和哥と手向るまひはして和國の風ゝ竹の竿に糸とりけて祈る意

△とり妻　逢ふことの糸ゝさゆへ名づるとも又方業に

(詠)やちゝせの神の氏代う爰儀人まうけゝう若ん人ともくい　人九

又灯火姫ゝもいへうう　證哥名

教和哥選に出ゝう

○故事詩哥次ふかゞく出す尚

又天の川ハ川をいへ小星の

あつまりゝるうけ七夕の由来

其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又い銀河抄

等に出すれゝ　ゝ　ゝ

△七箇池　△百箇池ゝも○七の盥に水とまて星の影をうつしをいへ

(詠)新古今

長家

わゝ合の新もやゝうれやせん

夫木

右京大夫

たゝいのあふうつゝ　ゝ

(俳)宴会の盤あやゝ蜘蛛丸　因元

△乞巧針　婦人七孔の針に色々の糸をとゝして七夕たむけるなり

(詠)千五百番哥合

ゆいつゝも行末の紫ゝとや

結ひうさめる手ゝさの糸

△占蛛絲　婦人此蜘蛛等を供へ祭て次日早旦の上

ゝ蛛れ巣といふさたれゝ坊

と得ゝう寺

△願の絲　五色の糸と竹の筒に

かゝて手向るなり

(詩)頗絲七字對句　詩礎

虚無天上支機石　穿針時

昔漢武帝ト云人ガイカタニ乗テ天ノ川ヘイテ一日ノ女ノ人ヲ乗セリ石ヲモラフテ来ル云ハ前ノ春二三月比ヒハ七月ヒ

・信有人間乞巧縁（誠ニ人間ニ乞巧ノ縁アリ）
人間世界テハコヒネガヒノイトニハリヲイヲシテ婦人ガオモヒ〳〵ニキヨウニナリタイト思フハ一コトニ今モアルコトジヤ

・願絲針（ねがひのいとはり）
トガイノイトハリ　スヂカヒニミエル

△星の手向（ほしのたむけ）　燈火其外何にても今日星に供する物を云

㊂ 夫木
向ふ家の玉れをそらにむけ向して庭にかゝる秋のともしひ　常盤井入道

△庭の立琴（にはのたてごと）　㊂ 夫木　七夕のあまの夜わたる庭にならぶ琴のあまりにもくれなゐのいと　家蓮

㊑ 立琴や寄にさかりし京の空　蕪己

△七夕に借（なぬかにかす）　物手（もの）七夕に供る物をかすといふ中にもいろ〳〵衣をかさねして是とも手向しなり

㊂ 後撰
ひさかたの天の河原に衣かけてわけはなるるを見よ七夕つめになかふかしてなかふ　慈圓

△水掛草（みづかけぐさ）　貞徳の説には水影草は多くは七夕ならん○水掛草も稲のよみなるを稲は水に影のうつりの故水影草と号く尚又盆の處にも記をく

㊂ 延文百首
七夕乃紅の糸のおもひの川あかね葉の露もかはらし　賢俊

△梶の葉（かぢのは）　七夕には七枚の梶乃葉に手向の歌をかき五色の糸にてむすひて屋の上にあげてまつるものなりとは中院通茂公の御説なり　漢雲問答に出

㊂ 夫木
かくれにそろる梶の七葉にそめしとも秋のあまりいつかはまつれ　入道前大政大臣

新古今
七夕のとわたる舟の梶の葉にいく秋かきつ露の玉つさ　俊成

㊄ 梶とらも来よる遠き空　宗祇

㊑ 梶の葉や家にはまつる星の末　杉水

㊔ 梶の葉を手にもて星の棹さしてをのいはひ渡やまろかん　曽石

○一説ニ梶ノ葉ニ歌ヲ書キ糸ニ結ビ付ケ竿ニ引キ渡シ造リ木ノ葉ニ歌ヲ書キ糸ニ結ビ付ケ竿ニ引キ渡シ

星契　牽牛と織女と年々今宵の逢瀬と契約とる心く

(元)草庵集　ゆかりしたのむ星合のそら　頓阿

星迎　織女牽牛とまちむかるる夜といふ心なり

年の渡　一年に一度天の川を渡りて牛女の逢ふなるゆへ年に一度とも云ふ　隆康

妻迎舟　織女が牽牛とひとに出る舟といふ心なり

(元)白川百首　顕朝

天の星のつるむ人舟ゆふしてまち侘ぶ逢ふやさ〜かな姫と迎へ舟是等

妻乙船　牽牛乃乗りて来る舟といふこころ

(俳)日も暮ぬ天の川の女七夕如春

○星の契りう此処そい哥の詞

七種の舟　草花にて舟とかざりて七夕を祭るなり

○秋あさ〜。尾花。葛。女郎花。撫子。これと秋の七種〜

秋さり衣　彦星の着て〜

(元)万葉　七夕のいたくたてる布の秋さり衣ころもかりこん

夫木　七夕のいたくたてる衣の秋さり衣ぬれ〜赤人

天河　異名　銀漢　韻府　天漢　同　星河　詩学大成　明河　古文

天漢　梁何遜詩　銀漢　雑録集

雲漢　唐詩記

和名　あまの川　古今　あまのかは　日

やそ川　重玉　星のやそかは　四季物語

(云) 新勅　後二条院

ふるあらしの川浪たつる天乃川
ふるてもうの花の秋の夕暮

連 波さわぐやいくせ天の川　宗祇

俳 七夕ふ風ひ清られつ天の河　珪林
むさ〻聚ふ〻くて細しその河　珀洲
ふるかとてとろつまて張し船の超波
河もの芦漕とやてられ河　牛雪

狂 そふとしくかさ浪ゆ〻と天の河
玉のさろきはし合の元　紫若

詩 銀河詞　杜甫

常時任顕騰秋至最分明アヤノカハト
云モノハツ子ニ見エタリ見エナンタリシテ
モ気ノツカヌモノジヤカアキニナルトキツウ
アキ〻ツカ
ニ見エル

縱被微雲掩終能永
夜清カノアヽノカハガムラ雲ニオホハレ
テモツイニハヨドラレニキツカリ
ト見エル

含星動雙闕伴月落
エル

邊城ソノアヽノ川ガホレノヒカリヲ
フクンテハキンリノオニナガメ
ナリ月カゲニツレテハ辺塞
ノ地ニモ見エワタルト

牛女年々渡何曾風浪生
牛織女ノ二ツノ星ガ
年コノ天川ヲワタレ
川トチガフユヘニ風ヤナミノオコル

紅葉の橋 (三) 次ノ詩ノ註ヨリ　草庵　頓阿

今日はよも雨ふさらしてもれ河
くれる井ゝるるやろん

△烏鵲の橋

橋○織女ハ天帝の女牽牛と夫婦として後機をおろそかにされてこれゆへ天帝怒りて其中をさけ河を隔てて住しむ七夕ふ一度會事をゆるす烏鵲この橋をなして織女を越さしむるとつたへこの橋ふつうて紅涙を落すこれふるて紅葉の橋ともいへり俗諺にそ信用をふたらずとぞ博物筌ふ和漢○かきをろかきを種類なり

夫木　俊成

七夕の雲えぬ契りを添んこゝやこゝにたなびくらんかさしの山

雨後いとゝ　七夕の歌詩連俳　かづく いとうす

六百番哥合　家隆

あまのゐる庭のさゝ竹ひとつこえぬよやあめのゝこん星合のそら

夫木　為家

あいもとゝへいくよ世もつくしてあれそのかくやふうれを星合のそら

永久百首　七夕後朝　兼昌

朝風ふ川波さわぐ一夜つゝ方そ面ゆゝしかふれもあとなくく

家集　海路七夕　経信

星合の彩ぬうつをふるこの海もあまの川波のこちらそとれ

新續古　待七夕　洞院摂政前左大臣

あまの糸そゝ多河のまとより

あれはまいあををかあ　家隆

續古　七夕別

あまの川あれはやこゝの陸ろそよもさたゝ波淋ゝなゝ

續千　閏月七夕　前中納言定家

契りあるそれ色ふるさの数そて

ことひもゝゝもゝ天の川ふも

白川七百首　二星逢遇　俊成

七夕の逢後いさゝ山遠うし

なゝ一ゝ夜ふ一ゝゝうゝ

哥合　閑思七夕　貞継

八重葺ふ彩淋どうれ分て

うゝ合の雲を袖ちつるゝ

白川　七夕契久　御製

七夕の天の羽衣いとなてゝ

たゝゝあやゝふのたなゝよゝ

詞　あふよ。年ふ一度の契り。まれ

あの中。雲のゝゝう。秋の一夜

。恋ゝゝう。逢瀬。たえぬなう。

七夕の花ゝゝ。恋の思。庭の露

天にハ星合の空○行合の空○初秋
の空○夕づく夜○月の船 風にハ七
夕の秋吹かへし 雨にハ七夕の涙の雨
○天の河あまそゝぎ○あまの瀬かはらし
雲にハ雲の衣○雲の通ひ路 年にハ
年にまれ○ひとよにまれなる○年のよ
秋契り 天河にハ ひこぼしあふ瀬○八十
瀬○浅瀬ふむ○河瀬○河長○河と
舟にハ渡しもりかへ舟○紅葉の渡舟○か
へさの舟○天の川舟○やとの渡舟
○月の舟 橋にハ紅葉の橋○かさゝ
ぎの橋○渡りの玉垣 夜にハみじか夜
枕にハ天の河原枕 床にハあふ夜
の床○玉床○莚かさねる 衣にハか
せる衣○天の羽衣○秋さる衣○
暮れぬ衣○雲の衣 糸にハ秋のいと
○竹の葉に結ぶ糸○七夕のいと○七
夕の手引のいと 梶の葉にハ梶にかく言
葉にハ 夕にハ逢瀬といそぐ○夕待く我
のた こと〳〵ぞそ○はぬ○花ぞてめよ

寄 ほかなるくハ七夕の朝妻の家の寄とよう
て七夕にすのまてゝまちかう又七夕の家
にふれ玉はさ あかのむつき七夕 機 おりなど
るもそも みそめるとよう
夕の物をく とりハ 虚ふ火をと立て 淀本
なそくとよう まちかう
天の川ふかゝへ 梶代 梶代のうちとよう
うれしとあう 七夕のちれ一本と梶
ほうう衣やう 萩 てふのうきと七夕のて
とうしむとあり もろつうしきうしなくひ
又ゆてまち向き とゞる 七夕まかせる衣の紐
ころもよあう ふえ立又ゆてたひけ
ゐゝ 葛 くつの まれふめる秋の常夜し
とも ふも
又宮ふるけり 女良萩の花と句にあさ
てらうるう 天の川
ろほやと七夕の こがうけ妻 ゐうけ
七まあり
ゑく 艶のふろまうひ くものあうるふ
よあう ころかれ人の
ろるあるせとらうされハ七夕も
ま川への人う秋く人のまへんとく そゝ昔
むし 七夕の衣と やうあうます
織てまゐらせ かうると とゝろあり

(連) たなばた渡やらの波つらの昔衣 行助
夕ぐれハ月や仲立ちあまの川 宗祇
行合のあとや雲井の天法星 宗碩
行きれや七夕星のあすな衣 心敬

[illegible]

(俳)七夕かさのうつろふ[illegible]　紙衾の上うすの川　晋子
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　十丈
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　才麿
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　露編
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　二柳
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　立圃
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　移竹
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　貞佐

(狂)[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　雄長老

七夕ふ[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　宗牧
かしまさ[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　由縁紅

(詩)七夕五字對句　同上

巻慢天河入　故郷臨桂水

(狂)[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

開窓月露微　今夜耶星河

(詩)七夕七字對句　詩礎

月渡天河光轉湿　懐良霄

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

鵲驚秋樹葉頻飛　銀漢同

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

當簪半落天河水　織女星

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

遠徑全低月樹枝　笑牽牛

(詩)七夕詞　王建

銀燭秋光冷畫屏　輕羅小扇

撲流螢

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

ブーキ　王階夜色冷如水　卧着

ラタク

牽牛織女星　タヽノカケハヒノヨルノ

ケレキガスヾレウレテ

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコヽ子

テヨヨニノヒタノアサセラウラヤヽレウヽニ居ル

(詩)仝　明　馮琦

天空露落夜如何漫道雙
星已渡河空ハレヤカニツユモオリテヨハナニドキデアラウト
思フニ大タ今コロハ二ツノホシガスデニ
アノ河ヲワタリ玉ハントスルカイフ
見說人間方恤緯可知天上
不停梭ヲ星ニサヘゲルケト天上ニ
ハオリヒメカ梭ヲヤスメズニ
ハタヲオラセ玉フト思ハレル

詩　唐　祖咏

全

閨女求天女更闌意未闌
金易臨風整線難ハリノミヽズヲ月カ
向月穿
線トモニ七夕
祭リノ故事
不知誰得巧今且
試尋看コヨイ乞巧奠ノヽツリヲシテタ
レカヌイハリノ手キハガアダツ
タヅヽヅコヽロミニ
トフテミタイモノヽヤ

○七夕手帥之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭
上願絲多ヨク〳〵思フテミレバワカ
イ女トモガヽイ年ク〳〵ホレ
二子ガヒヲカケテテキニナラフトオモフホ
ニサホノサキニカケタ子カヒノイトガトカク
オホイ
フジヤ

○二星適逢未叙別緒依依之
恨五夜將明頻驚涼風颯
颯之聲ニツノホシガタヽサワニアフテ
ヽタ別レキハノ〳〵トクヽシタウ
ラミヲラモ云ツクサヌニ夜ガハヤウアケカヽル
カシテシキリニスヾカゼガフイテクルコヱ
ニオドロキ
タヽハン

○露應別淚珠空落雲是
殘粧髻未成七タノヨノアカツキノツユハホ
ヽカムセレク落ハヤウニミエルヨヤケノ雲ハオリ姫ノヨ
ミタレガミノミダクタヲヽタツクロハヤウナケギヤ

七日

妙藥妙術

房事を戒む 今日と十五日と此両日房事を戒めはしむべし

白髪を除く法 今日百合の根を煮熟し搗て新しき瓦器に盛る屋の内に掛帳乾かして百日置て白髪の人なれば下地の白髪を悉くぬきさりて是を塗るに黑髪を生じて白髪なくなる

身面の疣を去る法 今日大豆にて疣目の上を三度ぬぐひ其大豆その人の家の南向の屋の東より第二番目の溜とりの中へ種をくべ

記憶の術 今日蜘蛛一ツとりてその〳〵の一所ふ疣も去るべし

領乃中ふはゐ是ばかりの物をつゝく能くものを忘れず事なし

○近年彫刻ふさる物覚早傳と云る書あり甚よろしき本なり

状 七夕之文

晩来雙星之佳會世間巧奠書瓜之奉女児之事不宜乎併待狂駕

尺牘 日暦并註

晩來 今夕○今宵○此夜○往

辰 双星 牛女○両星 佳會

佳期○良夜○嘉遇○年會 世

間 万国○世上○古今 巧奠

穿針○絲縷○願絲○琴瑟

青瓜 菜奠○緑菓 女児 婦

女○少女○妾婦○兒女子 宜

平 可賞○愛憐 併待 云 五

中 請来藥庁 上 仰候顧歩

上 来遊刮日期

七日毬

△七夕毬○飛鳥井家○難波家鞠の會例

式る り今日の鞠い七夕祭の為ふ奥行とろへ出うい年中風俗考に見えたり

七日 京都北野御手水 北野天満宮梅松院

の主今曉御本社内陣ふ入て御手水を献ト又神室乃内の松風乃硯ゆりへふ掬の葉をそへて備へたてまるへこれい七夕の神詠と天神ゑゝ昏を玉りと為くしそ

池坊立花

京六角堂方丈へ池の坊門人集ヲ二星

へ手向とて立花と奥行と立花へ当任職専慶法師より初る

○東西本願寺ふ立花あり又数品の艸花まて作ゝ物あり是と

△本願寺の竜花といへり

○天竜寺虫干○加茂松下虫干○東山一心院虫干○大徳寺虫干

大坂○住吉虫干神室ふかく出る○平野大念佛虫干

江戸○九品佛桑えゑ○本所回向院大施餓鬼あり

大和○石上布留社菱渡の護ゝ。菱を三ツ僧の肩ふかけて行ふあり

逆峯入

△大峯と称るハ即金峯山也宗派ふ本山当山の別あり本山の峯入ハ則今日まて聖護院の宮より逆の峯入又逆峯とも云大峯より熊野ハかけめぐる又本山當山

の御門主ハ御一代ふ一度諸ゑけゑ
ハ秋山ゑう毎年の登山ハ皆御代
参ゑう醍醐の聖宝僧正ゑう始
るゑう委くハ三月順の拳入の処記す

八日 京都 文珠會 仁明天皇の御宇より始めて東寺
西寺にて行ゑる 公事根源ふ出
(俳)文珠云や君ゑ臣ゑ兄ハ 賢
江戸 ○同向院佛飾施入の旦主現
當両盆乃法事執行

九日 京都 六道参 △槙貫△槙買
△迎鐘○建仁寺
の南ふある六道の珍皇寺と云ゑ
寺へ参ゑ代云ゑり今日明日諸
人此所ふまゑで聖霊とむゑる
とゑて此寺の鐘をゑく是を
迎鐘と云ゑ又槙の枝をゑく
ゑう持佛堂ふおく俗ふ聖霊
槙の葉ふのゑて来ゑめふと
ゑう珍皇寺本尊ハ茅師佛へ
小野篁の像と小堂ふ安置を
篁此處より冥土へ通ひ一道
ゑりゑて六道と云ゑ
(俳)ふ[illegible]て来る山[illegible]春

十日 諸方千日参 △清水千日参
観世音菩薩へ
今日参詣ゑれハ千日ふおゑゑふ
或ハ四万六千日ふおゑゑて諸
方へ参詣ゑるゑ京清水江戸浅
草大坂天王寺その外諸方観
世音ハ今参詣おびゑし 河州
野崎観音 和州奈良二月堂

十三日 今日枸杞の煎湯ふ浴ゑれゑ
無病不老ゑく雲霞ゑ繁出ゑう

十三日 魂迎 △迎火○今処方ふ亡人
の聖霊をむゑるゑて
麻殆とゑて火ふ焼く是を迎
火ゑ云ゑ佛家ふ説多
○世間ふ松を門火ふ焚ゑ槻の枝
ゑて清水をゑく事ハ

火の陽光と以て天の陽の魂と降
ー水の陰精そ地の陰氣魄を
呼びのぞして亡者の魂魄をむ
るるるべー　蓋漢土の鬼神を
まろる式をまふるひくるるものな
らんう。
○唐土ふも亡人の魂をむるる
て官服を着し門ふ出て空と
のぞ神を導き祭りて
又神と送り出る事あり
ら孝子の誠と父母ふ仕へ
ども児どものたくむきん迄
士君子ふる人佛者ふまどひ
てかやうれるざ式なす事なり
事と　五雜俎ふ見えり
非　於ふ火紙芦の案なや玉造　其角
狂　足て浄むまそそそそ其角
むなわそなるりの人常農菴

十三日　京○東西本願寺　灯籠
都　拜見十五日まで

十五日　中元　正月を上元し十月を
下元とふ今日を佳
節とすること少くいそれる
きよあるざれども公式ふ用ひ
られをくるーくハ日本歳時記
ふ見えそり

盂蘭盆

△盆會△盆供△盆
△施餓鬼ハ盂蘭盆
會の遺風すて常ふも寺ふて行
ふ事ふれども此月の内ハ諸寺
ふて專ふこ式ふ
なるべー○勸善彙纂ふハ蘭
盆法事ふ
のこ式ふ禪家ふて焔口施
食といふ
○釋迦の弟子目蓮尊者の母地
獄ふ墮餓鬼道の中ふありて
食をる事を得ずして此日百
味の五菓を供ふ十方の諸佛ふ
供養せしめる人ハ母則ち食を

得こうく經論の意をうこの說
ようして盂蘭盆會となす事
始まりといふ盂蘭盆は梵語
なりて中華の語に翻訳とすれば
倒懸救鬼といふ事へ倒懸はさ
うさかふかくなし訓地獄の若く
をいふそれを救ふ者を祭り乃
そのへとを救鬼といふなり
又救鬼とい救器とかさて救ふ
器なりとして公事根源に出
○唐土にても今日盂蘭盆會を
諸寺院にて營むへ事文類聚に出
○本朝にて齊明天皇三年ふ
盂蘭盆會と設くと云り日本紀に出
其外委しくは眞俗佛事篇
といへる冊ふ出しうるべし
○儒家の說にい今日中元な
ほ以て先祖を祭り秋の盛
事と告奉るへとあり此こと
委しくは歲時記ふ論を故畧之

靈祭

△聖灵祭△聖灵棚△灵棚。十四日より人家ゑ
新ふ棚をまうけ先祖の灵を祭
る。○報恩經ゑ云く迦人年ふ
六度来る中ふも今日は盂蘭
盆ふあうれば必ずうち祭るなり
十四日卯の刻ふさうう十六
日午の刻ゑかへるよりへ
△枝大豆△枝大角豆○芋の葉
△青瓜○蕎麥△青そば○早
米△青かさ○茄子△あさがほの
著△蓮の葉△かけ索麺△あり
の実○桃○苞。右の類祭ふ供ずへ
△此印の多い季ゑなるなり△
まるしるしなりまうの心と
よくく合ていい季ふあるべし

(多)年中行事哥合　前大納言

ゆくへもやくのはきこもるあん
たま祭るてへ人は月をなるけ
(非)淪おもひ水奥ー　灵祭ふり　嵐雪

昊祭々人も燒物のなり芭蕉
棚経や声のそろひ坊さま 其角

(狂)ゑろ入るゝ舟をしかけあハ出る 陀人

棚經

今日其家の且那寺の僧來りて昊まつり計前ふて經とよむ是と棚経といふ

(俳)棚経やこれ暁ふ阿闍の水 其角

鼠尾草 (異名)

長くして水とそぐふ便あれい名づく全躰熱と治し渇と止ると本草にも見えさ

渇と止るゆへ餓鬼ふ水と手向ふ用ゆるとぞ○七夕の外ふも水うけ草といふあるて稲のとゝしとそれども今日のうけ物ハこれ〳〵のの事なり藻塩艸ふも出又千梅子の説も同し

(云)藏王 それむうゝ〳〵ふやれんゝ毒水かゆ者まのはものまふく

墓參

京都八七月朔日頃より十日頃までふ墓まゐりをるゝ○大坂ふハ今夜亥の刻頃より明朝へうけて千日ゝびさ小橋等其外七外の墓處無縁の者參詣をるゝ是と七墓廻ゝと云○唐土そも今日先祖の墓と掃除して供養をるゝ

玉箒

(俳)おゝて屋拂て玉箒 康吉

生身玉

△荷葉ふ包を吉祥蘭と荷飯。糯米て荷葉ふ包を吉祥蘭と括て贈答て生身魂と祝ふしいゝ

○今亡人と祭る法昊祭といふ生る父母と饗應をる法生身魂といふ此月公家武家ともふ世ふ在ては尊親を饗應をゝ事 紀事ふ出ゝ

(俳)たくはゝる玉とあぐこて茎の飯 友静

△差鰆 鰆の開きて塩ふつけ二尾と合して一刺し云是し蓮の飯し親族たがいふれく云て今日の祝儀しなす

(俳)ぜんそ鰆の骨多のくそ生多重古山判終やうしてしりをまへ婦つま其角

△鮮夏 夏の終こと。僧△夏昏納め。今日まて終こと。○

徒四月十五日より夏ふこと。僧夏籠佛経の類抔昏写を故夏昏納め

又夏鮮しも云也尚四月十五日の所又夏の十九丁メ等見合をへし

△鮮夏草 夏ふこと。僧夏籠終こて終こて絲と以て節と

束ねて且家へ送ると云出す。○一説ふ言樣中のこと〳〵と以て

○教民要覽曰唐渤右の僧絲と以て節て束て且越ふ送る是て夏鮮中と云

今此中て詳ふ考ふ己ふ五部の法身の座しなる名つあて吉祥中と云

京都 ○智恩院山門施餓鬼あり ○新善光寺阿弥陀開帳あり 泉涌寺の内ふあり ○岩屋不動千日参今明日

十五日 △安居頭 昔八幡ふあり今八十二月十五日討あり

江戸 ○弘福寺施餓鬼。法事の後相撲あり ○白金瑞聖寺本所羅漢寺施餓鬼 ○麻布善福寺藏王権現まつり

大坂 ○天王寺講堂一夏の結願 ○住吉盂蘭盆會角力あり

十五日 近江 △三井寺女詣 常へ女人禁制の山なり

今日一日へ女の参る事とゆるす三井寺の訳へ委しく博物筌ふ出ぶ

近江 ○浮御堂法會。志賀郡堅田七月十五日より同十八日を法會有

十六日 国俗今日親戚て會して遊樂とす事正月十六日ふ等〳〵

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付ク入来年不作の兆と

と○今夕月上ること早く晴て
く月上る事遅々し秋雨多し

十六日 △**水灯會** 宇治黄檗山の僧宇治川ふ出て修行す

十六日 △**施火** 送火たくさもつよく
△大文字火 △妙法の火
△鳥居火△舟形火○京洛外乃
山々まて文字の形ふたき木とん
てやくるり其間一丁二丁にも及
ぶ人鹿ケ谷大文字此筆画甚と
市原山のいの字松ケ崎の妙法
の字西山の鳥井の形西加茂の
釣舟それ外東西北處々乃
山々まあまたあり甚見事
なる事なり
又施火ともつよ

△**送火** 魂迎ー聖灵と送るとふ麻柯と燃と

河邊ふ

つ京都の俗ハ今日より大坂ハ
十五日ハ其餘處ふよりて變まり

(俳) 送り火ハ空ふ消ぬ大文字 其角

大文字ハ今日ハ流せ荘渡川 三惟

京都 **鹿魔祭** 今日て焔王の縁日寺
京千本焔魔堂泰詣ス

△**松ケ崎題目踊** 松ケ崎妙泉寺
堂の前ふて男
女うちまぜり題目ふ踊ーと付
事て声れりくくとるる

○山崎宝寺開帳○北山村石不動
泰○紀森念佛踊 昨今西日

江戸 ○焔魔泰○増上寺山門開
○雜司ケ谷とまつ

大坂 △**經木流** 天王寺亀井ふあり
今日經木の表ふ
人の戒名法名と記ー亀井
の水を手向事とふり

十六日 △**新綿** 内裏貢の綿を
つ則真綿ふり

（哥）夫木　為家
駿河なる冨士のけふりは秋はへ
たなひのきれぬるに似るらん
○右證哥を出して眞綿とく
後に永禄の頃より初て木綿は
舶来し故證哥と時代大に相
違せる事と見つべし俳諧の
季寄集は九月と出し三秋
に渡るといふものは藻塩草と
見る誤なり七月十六日は
定まる事なるとや○新綿と
して九月にもる事はなしかる
まじきにや尚九月の條にある
を見るべし

十六日　衝突入　伊勢の山田にあるを
ありすべて人の家
に秘蔵する物を見られもと
思ふもられは今日其家につと
入て見る事なり往昔は諸国
にもありしかど今は絶すり○今
猶伊勢山田に日の丸名号と
て圓光大師の御筆を出して
拝ます寺あり此日近辺乃
寺院も出しもらひをられ突入
の餘風なりとぞ
（俳）まち入や大きくりとけるく　波由

十六日　鷹塒出　四月に羽毛脱ける時
鳥屋にこめ置て
七月中旬新毛を生ずる時塒を
出すを今日塒を出すとぞ　藻塩艸に出づ
○貞徳曰鷹羽出揃ひたる時夜
分盆の聖霊會の著をとりて
塒より出す故に鷹もよ
（哥）寄るはるやまろくかへり色あく
今朝とやをとりかへし　忠家
ゐる屋出を秋にかけする迄　寄るの日
日次の御狩のさ鳥そ　定家
（俳）炒火の片るやもし学窓　三惟

十六日　妙薬　去三尸虫法　庚申の日ご
とに手足の爪を切て

うり集め置て今日灰ホ焼て水ホ
てのむべし　叔そのち一度庚申を
守ま[illegible]ハ三尸虫と伏し押へて天上
へ到らしめず七度庚申を守レ
ハはてぬホ三尸虫をころすよし
徐春甫ガ古今醫録ヨ北帝
玄経と引てくハ
しく〳〵説さうり

十六日　赤壁月　今夕ノ月ヲ云○宋ノ元豊四年蘇子瞻

東坡居士ト号ス　今日赤壁ト云フ所ニ舟遊ビシテ賦ヲ作リタル故事ヨリ起レリ

賦　古文真宝　前赤壁賦　東坡

壬戌之歳七月既望蘇子与客泛舟遊赤壁之下清風徐来水波不興舉酒屬客誦明月之詩歌窈窕之章少焉月出於東山之上徘徊於斗牛之間　下略

○既望ハ十六日ノコヘ　蘇子瞻此日客人ト共ニ舟ヲ赤壁ノフモトニ浮ベテアソブニ清キ風ガソヨクトフキテ水ノ波モタヽヌホドナレハ盃ヲトリテ客人ニサシ月イデヽ明ラカナリ窈窕トシテタヲヤカナリトイフ詩ヲウタフト云コヽロナリ

十七日　京　都　○壬生寺　六齋念佛　○上京小川本法寺虫拂

十八日　京　都　御靈御出　神輿今日御旅処ヘ御出ス

祭リハ八月十八日ヘ此日ヲ間御旅処ホ御鎮座ヨリ委シクハ八月ホ出ス

十八日　宗祇忌　俗姓ハ飯尾次郎右エ門と称セ人ヲ紀州の武家ヨリ世ヲ遁て薙髪シ京師ホ住シ生涯を雲水ホまくせ行脚セ今ハ連歌乃達人カリ

十八日 △文學上人忌 行狀委しく博物會ふいとす

廿四日 △諸方地藏祭 今日地藏を祭る事ハ是又扶陽の術ふして秋の金氣を扶ん爲地藏を祭るなり〻〻殊ふ石像を祭る事ハ神道ふ石とまろるふ比論して始めて訳ある事なり

京都 ○六地藏祭詣。加茂。山科。御菩薩の池。伏見。鳥羽。桂村。已上六所○愛宕山千日詣○町々地藏祭を設作り物となす

○大坂 ふが堀詣地藏祭分て賑ひ

○河内 八尾地藏會式なり近郷より群集す廿三日廿四日大市あり八尾のかゝさき市又鬻市ともいふ

あたご火 摂州池田伊丹ふあり彼地の愛宕山ふいろゝゝ燈籠提灯を影ゝく燈して祭るゝ其火光近郷ふ映す

△鷹山別 鷹の親子巣と立るふ飼ふハ諏訪明神と始め廿七日御射山祭ふハ鷹も詣ずる故廿五日ふ巣を掃をそうろうこの事おゝ〻ふ論あるゝハ〻くハ補遺ふ無明を

廿七日 信濃御射山祭 憲家作りの御神事なり

(俳)家をこ別も爲の眼ふ芭蕉

信濃國諏訪明神此日薄を神殿とせる其外人家も祭りの程ハもゝ〻れとふくなりきとみをしといふむゝハ勅使あり御狩ありて鷹とつゝ

(句)かりてふく秋屋のもゝ〻の山なまま芋やハ爲るゝ〻〻ん 定家

(俳)夫木 尾花さく秋やの門の一むらふもり里ある秋のゝさ山 盛久

(俳)かゝ夜の神も鷹とふく日外許六

月令

此部ハ七月一ヶ月の
こと共を集めしるす

攝待　△門茶　往来の人ニ茶
と施すこと伝いふるる攝待
の事ハ仏祖統紀碧巖録等ニ出て本
唐にも古く有来るこなれて本
朝の俗称ないあらぬ攝待の事
い常にもあれども此月初より
廿四日頃まで敷ふあり
(俳)　扶桑の茶にも茶と云こと道之

燈籠　△高燈籠　燈籠
△きりこ　△船灯籠　△花
燈籠　影灯籠　西ハ　△折り灯籠
△廻り灯籠　△軒の灯籠　民俗佛
事とする月ハ佛ニ供する
殺るべ多く十二三日頃より此月
中より寺禁中の燈籠ハ十四日の
処ニ為ると又大坂ハ墓所ニ
も十二日より十五日
まで燈籠とする

(宗)　七月十五夜月はかうるは　西行
いそ我今秋の月ふ身をそへて
あなたの山路の人をこそ思へ
(俳)　あらい行つくく思る灯籠　移竹
紙製と為それ灯籠の色字ハ　屋里

踊　踊躍ハ遊戯の長こと本
朝神代より有りのこれこと
(俳)　朝夕ふるふ踊の庭の灯籠　豊後
(狂)　さやしめる踊の庭の灯籠を
とりて折も小切籠そ　近吉

花火　炮術家の餘興ニ
物ふるう家々其業ハ
工くるる人出て種々の形をする
(俳)　什ふ手ハ接ふ花火ハ　半夫
(狂)　什火入さそい小町ふ弱藤ふや
為生ふ花火せんかう　負山

秋扇　△扇置　△扇をそる
△團置　△團をそる
(連)　風とるふ紛ふ紙の扇ふ宗祇
(俳)　ふ紛て至てもふ扇ハ一前

(和) 夫木

秋の扇を　定家

秋の扇詞　王昌齢

(詩)

芙蓉不及美人粧　水殿風来珠翠香

美人ノヨソホヒジヤガ水ノ上ヘカケツクリニレタ御殿ニ并テ玉ノカンザシニデガハナノ香ニ匂フヤウナ

却恨含情掩秋扇　空懸明月待君王

扇ヲ負ヲオモフハ何ノ

センモナクソラニアル月ノヤウナ扇ヲカザシテ君ノミユキヲマツバカリジヤ

京都六齋念佛　京師下カ茂の東平菜寺ハ豊大

△閻の御時六齋念佛免許の状給はれり。盆中近在の農民太鼓鉦笛と合奏して六齋念佛して洛中を歩行す。和州ふも處をふあり

△相撲節會　△こゝろ使　△童を　△相撲是ハ三秋ノ事云

△辻を　△日土　(漢名) 角觝

もとゝ互ふ力と争ふと云

古訓ふをまふとゝいへ俗ふ孫ち

ゝ人心の言葉をり角力

又ハ相撲をゝ文字いかゝ

○禁中より二月三月の比諸国

ふ使とゝ召されて力者どもゝ

ゝ事と部領使ゝ叔相撲の

歌會ハ天子も御覧ある事ゝて

先十六七日の間ふ召仰ゝて

あり廿六日ふ内取ゝて憤鼻の上

ふ狩衣袴を着て勝負ゝ廿九日

ゝゝ召ゝ今諸社の祭ふ相撲と

取るゝい禁中の節會と八幡

春日をゝ給りゝ始ゝ

(ち) 年中行事哥合　女房

かゝさゝれてゝ

ゝ人のゝゝの

(能) 胡蝶舞　香炉

時令

此部は七月一ヶ月乃時候かろかろしるす

初秋（しょしう）　朔日より三四日とかを和哥にいひろくよしとす

みて七月ゆうむまぞのけしき
をもよそそろう

寂蓮

(元)千載

秋の来る年もすふるあとやと
萩ふく風のおとろかれうん

為尹

仝　初秋衣

小袖衣かさねもあへと吹にきう
まくれ一条の秋ぬとそれう

鎌倉右大臣

金槐　海辺初秋

夢たにも好をそ寄ふ朱に赤し
ゆふ上の浪乃うしろの汐むかり

(同)まくれ浦さ秋の色。秋と道ゆ
他。秋て涼し。かや衣。淵芽。岩
の松風。今始て涼しき。若ふ者。
夢むとふ。むろ風ハ別ふ。むは
の初風。松のあど。初秋風。萩ハ峰初。
好を初。萩ハ寄こそ初。好とは
ゆる松ハ風の寄ろろ。淋しき　桐ハ
ち初る。相の一紫露ハ並初。好
と先しる。秋の寄露ハ寄ふ初る
扇ハ扇と寄と長ふ寄る　葉ハ八重
むろ寄ふ乃宝乃宿にもさりしで
秋来る。薄ハ穂ふいでそむる。
浅茅原ハ寄ふ初るさそむる
柳　柳ハ初姫ふ一紫ちろしとと
ふ立秋の処ふ故事あり
山ふとし風ふく寄ふべしそ外やま
の京物をとらせくもよそう
(俳)初秋ふ公ふ紅ふ縄すくれ　嵐雪

(詩)初秋五字對句　同上

輕風換炎秋　桂月秋先冷
明月流素光　蘋風向晩清

(詩)初秋七字對句　詩礎

地接邊關秋　色早動秋聲

樹翻鳥鵲月明孤　片月孤

ツキガサシレミル元

詩　初秋詞　五言律　元鎮

且暮已凄凉離人遠思忙　アサタヘヨホト

ヒヤヽカニナリタルユヘ旅人ノ故郷ヲ夏衣臨

オモフコヽロガサハレウナル　ナリ

曉薄秋影入簷長　ヨタノ衣裳ノ二ヽ

ナレバ夜アケヘニハ

ハタウスニ覚ヘハニ夜カアクレハ前事風隨扇

秋ノチキガキフカフ入チクル

歸心燕在梁　スキサリシ夏トハ風ノ扇

ニシレタガイテウテアトモナ

ク古サトヘカヘリタイ心ハウツバリニ

アルツハメブミチモウラヤマシイ

女河漢正相望　ヲリフヒセタノ天ノ川ヲヘダテ、

互ニ逢セヲ待テ井ルヤウス

エデカワガミツクサレテオモヒヤラル、

残暑

〈のこるあつさ。七月のちゅ

発よう残暑ともいフ

詩　秋風の吹もつよくぬ高原

夜のくきの花ふるるより　有家

連　暑さ日ぐらふ秋寒の比もる　紹巴

俳　気ふ流ゝ汗や退くよ夕　嘯慰

向ふ比の付句ふ移る暑さうる　昼斯

詩　残暑七字對句

暑氣尚能凌白羽　秋光早

アキノケシキハヤレ

アツサハヤハリ鳥ノ羽ヲハヒモ

風聲不肯入清商　夜色闌

ヨルノケシキガアカイ

カゼノヲトハ秋ノテウシイ　ラヌ

餞暑

〈送去餞ト云暑の去るハ送

る意ヘ故餞暑と云說文出

稲妻

〈光ってあつて雷なしぎる

といふ

ひかり同じくあれどもいなびかり

ととゝのへてい雜ゝうまれる窓

光るハ秋のうごゝにあらこれい

風雨よりはあらあらば季夏甚

き陽気秋収斂の時いうて陰陽

地中ふ伏せんとするひかり

相ひきたゝり合て光気となりを

季秋已後ハ夏の陽気收り伏

るをいういなづまなり○晴て

ひるハ風雨なり○秋の始曇り

て光るはでるとつの雨となる夕立（ゆふだち）
立気こそ長雨となりにけれ

（哥）夫木 山田もるすこく庵のまくらねに
いなつまはする秋の夕ぐれ　寂蓮
「かつきやてうけに光るいなづまを
山ふところの火かとこそ見れ　兼昌

（詞）あえか。ひかる。秋光る。うつる。そ
くなれ。霄ニハ宵の稲妻　雲ニハ雲の
ちづま。雲の露ニハ余りもさそぬ。
うつる。いなづまえりなき。渋蒲　夕立ニハ
涼し。〇無常　庵のちなみき　またゝくり外山。よ枕。
あきさる者。かつえれ。ふけゆき。

（連）いなつまは光におわ光を光るる　紹巴
「いなつまもまえかゝる物とうれ思ひ　玄仍

（俳）稲妻てもふかる雲の紙ぼつ哉　芭蕉
「おれ主は稲つまを稲たようれ　仝
「稲つまや往昔の松沖の小山　楚勃

（狂）稲つまのこえそえぬ紙衣錦木の
千本の数よ入ぬてちとめ　貞爾

（詩）稲妻五字對句　同上

爛迷星少色（ランメイホシレニシズイロ）　キラくトシテ星モ色ヲ失ヒ
照天飛火鏡（テラシテテンヲトバシクハキヤウヲ）　ヒカリハ火ノカヾミノトブトイフ
晃奪月無光（コウダツツキモヒカリ）　ヒカリトシテ月ノ光ヲウバフ
横漢掣金蛇（ヨコタハツテニセイスキンジヤヲ）　天ノ川ニヨコタハツテ金ノジヤヲヒクヤウナ

△秋初風（あきのはつかぜ）
（哥）〇立秋の詞かよみ侍る　亀山院七百首
「今朝の名に秋覚る涼しき夜風
ひとまふたちぬる秋の初風

秋涼（あきすずし）　△新涼し　△初て涼し　△あきすずし　〇秋になりて涼しき心を云へ
〇礼記大全馬氏曰涼風至るとれは天地の仁気散をしいり殺伐の時候になるそを知るべし

（哥）月清　野月露涼　雅経
「袖のうへにまもる月のかをるかな
ほのか吹猿の夜風そしるき

（詞）暁かけて。秋とまつする。夕くま涼し。露なるさむ。秋乱の風。風の音。吹きよふ。寒る

入。風ふく。夢あり初ふ。あま
のたのと志ゐれそふ
連 涼しそうれいあさ秋の風 宗祇
俳 盆おの涼きいかきあの額引 宗奥

詩 秋涼七字對句　詩礎

灌残暑氣朝来雨　三伏冬
助我秋声夜半風　一涼新

タスクワガこゑヲヤハンノカゼ　サンフクノナガツキハ
ワガ秋ノコヒヲ作シ詩ノ奥ヨ　イチリヤウアラタニス
ソヘルハ夜ルノ半ノカゼヒヤ　ヒヤ

△初嵐　△初暴風。初秋の末より
つゑ中秋の中比まで乃
嵐といふ○嵐と計ハ連俳ハ
雜ゐり△初嵐と云て秋ふ定む
ることハ春夏ハ陽気上昇する
時節故吹風もあざやかなり
秋より陰ふ次第ふる故吹風
も秋冬ハあしし故ふ初の字
を添て秋の季とす。青嵐ハ夏之

(ゑ) 夫木　慈圓

秋風ふ萩の上紫もみぢくて
あしふかうつる久ふてるるしき
詞 嵐ふうる。礼ふとあ。所ふ。い
ふく吹。あらき。吹まく。かる
ひく。つくさぬまる。ぬまー。
連 ぬやんぬるまく吹ふ寺秋嵐 宋頭
ふかりたる柴ふうむくやふ嵐 左秋
俳 糸入ふる萩ふす嵐の秋ふ 保久

冷ー　涼ーとつよりハ重く
寒ーとつよりハもろー

(哥) 雪玉集　實隆

かゝる衣野ふの名ふの朝ふむ
秋冷ーき花とふそ。ふく
俳 ふきまれ河の敷の古ふ 草薫

秋色　艸木山川ともふ色を
あらたむるとつよ

(ゑ) 衣ふふうれてもふ秋の色と
ふりてふきふる弱虫の花 顕憲

二百十日　立春より二百十日め
をつよふ今日の風

と恐るべし二百十日は早稲の花さう二百廿日は中稲二百卅日は晩稲の花盛りへ是より後は花ちり実ふるゆへ風吹ても稲はさらす稲の花は中に水のゝ如白きものあり是米なるべし風ふけは此水と吹ちらをふより米出来ざるなり雨ふれは此水を花にそゝむけよを風ふれてもさほどふ害をなさず雨なーの大風を恐るべし東北より吹を大坂にて上げと云此風吹はのきはいひえて赤けれども西より大風にて吹日多しよう是をきゝふ○東南の風といなさ或いいせうちとえあくてうるれども是もふさつのれば大きはふるとべて東より吹風は雨はるうざるは西より大ぜもて吹日ざす雨なれば赤ふ

とのあるなーー大形は雨なり○西北より吹とて出さるべし○西北より吹とあるせといふて日和より西南を沖氣といふ曇りてむしくれども日和つゞきのゝ赤ふもとり出せは此日和は長さもの〻て西より晴てくるはて物人は沖より雲とつきのふして雨ふるべし此風吹はけば日和も曇りも雨もふくく長くつゞくりのべ○申酉の方より吹とませといふ日和ついてよーー○東よりて吹こゝ西より吹風にていとといふ風あり此風は地へふれつゆて其所より風次第小もきいづるごとく大風なり稲と損ずる事甚ーー雲ありて北風は雨をはきどる哥ふも秋北とよりの秋は金より北は水と金生水の理なて雨を生ず

うえ出ても夜晴
て北風ハ日和よう〜

草木

七月の草木と集むる内八月ハ月ハ又秋三月ハ月のうり

楓 △青楓○本名を雞冠木くつかぶ
和名をかへでしゝて車ハ蛙の
手に似る葉なるゆへハ名づ
くるゆう種類ハ多し

異名 川楓。紅楓。霜楓。錦。
○和國乃楓し唐土の楓し
大ふかくちハ異なり葉ハ三角あ
るて両様ともひ出る

東楓

和国京都高雄楓圖

○かへで。ひさぐ。そて。ま
ゆみ。これ類紅葉をるしく
ハ九月なり人〜く九月草
木のをゝ後ふしるす

(ウ)乃葉 我家ハ多くもつる楓ろ毎ゑ
いもと ひつく 葉ろ日いるし

(俳)絵田川ハ氏ハ名ハ
まつ〜ろ〜ぬ〜ハ
風ハ〜ぬ〜ハ
ハ楓ハ紅葉ハ

楓紅蘆
芳室

(狂)まつ〜ハ
ハ入ハ
ハ去ハ
ハ皇

竜田ハ

楸 キサヽケの異名又雷電桐
ともいふ又かゝるみさゝげ
ともいふり此木雷除とする故
○さゝげのごとく長一尺許の莢
枝の間ハ垂る皮鱗のごと

異名 木玉。實名 楸。梓。椅

榎。ゑぐく少〜つかれて種
類多し。こひさゞ。そうひさゞ
赤芽栢。あづさ。河原ひさゞ
等諸家の説多〜ハ〜くハ
神遺ハ出ハ〜ハ

(ウ)夫木うい玉の夜の文ハ楸ハ
きよ〜ハ氏ハ名ハ〜ハ〜ハ 赤人

(俳)取ハて人ハ氏ハ楸ハ馬尉

柞 栢の屬なり実い漬くし て食ふなり暮秋ふ紅葉をれども色うすし哥ふも色うすく成ようとよめり

(哥)万葉 ふしるの石間ふのたをを原 とりくやゆくらん 宇合

(連)ちらぬうち柞紫色なる柞紅色 提河

(俳)柞紫ハ柞の男のそなふちり 檀木ハ檀木ハ文字たしかなり 檀

檀 唐土にて沈香或ハ白檀の類なり日本ふあることなし今にてまゆみといふものハ木なりなり枝よ矢の羽のごとく物ある木の種類なり其ハ羽なるをまることふ物産家衛录に充ち陸奥にて紙ふ作る物此木ハ

(哥)春のひを裏垣まもるこ色ふひし これをあしふもせもるる 顕輔

櫨 (宋名)黄櫨。天子の御袍これを以て染る故ふ黄櫨染ふ三月ふ白花を開き秋紅葉となる漆の類なり

木槿 日及。舜草。花ハ朝ふ咲 花ハ一日栄 槿花一日栄 諺者流槿と

て夕ふ隕る故ふ槿といふ今俗諺者流槿とあさがほと混ぜり むりきむくげとあさがほとハ しるべし次乃万葉集の哥ふて知るべし

(哥)万葉 ねぬ夜ハあき来ぬと咲くを タカ多ハ花ハまそさ成ぬ名ハ

○是むくげの哥なり古名朝顔なる事なるべし

(俳)水日ハ簡ふ生なる木槿ふ 芝室 ふとみそれ ふそれむくけん 杉風

朝貌 蘇又牽牛花とも昏く近世数種の珍花を出ぜり(一名)假君子。朝花ひらき辰の時ふ成ぬ蔓艸なり

(宗)浦風ふ浪や苔むしん後衆
石ひ的石の的色乃とる　題季

(詞)花の的色。秀の的色。ふ的
の性絵。仇るされ。一説。夕
かゝ者ーまるあ。志の先生。ア
石とふかる。さかりおそき。
秀ひいもも〜。

(連)むふ日代ゝき的色の後汁宗砌

(能)蕣ふつゑ折れてもひ水　千代
蕣のせいく咲て浮世うる　常牧

(狂)的色の秀ふなゝ人間も
秀ひく命のゝする的おさ　僧一道

秋海棠

異名　爛腸　斷腸　草。

花。りく海棠とゝ名ハ海外より
来る故名づく

玄及

會及。五味子。蕊を
美男名〜とゝ堂上方
まて今も水ふ浸ー孫まゝせて
髪と結ひゆゝく地下及ひ民間
ても元文寛保の頃までハ此製
残まり　賢附油さんふまりて
より玄及と用る人多ー只雲乃
上のゝ多り花ハ三月実ハ七月く

桔梗

蛾のひふさとゝ
桔梗の花咲られとゝ云ふる千代
桔梗の色老子の性ふ小　寒竹

(狂)的くてゝ〜も桔梗の染物や
色あさいてくつゝ見えう来門

澤桔梗

葉ハ山丹ニ似て少ー
短く又桔梗のごく
く大ふゝて花碧ゝり　根白ー沢
中ふ生ー長く生ふる又浮
蕎花も沢桔梗とゝう

(能)沢桔梗花の色そ沢ゝね　茶雷

蘭

京師の俗ゝランと称を
野ふある物ゝりを
の葉ニ似て切又ゝー薄紫乃
花とひゝく香ハ葉ふあり　蘭ふ

三種の異あり漢土の古蘭といふものハ今の茶蘭なり和の藤袴と称する物ハ本朝の昔より蘭といふ物ハ和漢近世蘭と称する物ハ建蘭なり次ふしるす

(哥) 古今　敏行

何人かきてぬきかけし藤袴来る秋ことに野へを匂はす

夫木　匡房

かりそめの世の藤袴のぬしちよまて千代の秋まて匂へとそおもふ

(俳) 蝉丸か抄へを擬す藤　支浪

藤袴たれのかまちかねるさうせ　声可

(狂) さきみれはあまれんてくとやらん匂ひもえさき藤とそ見へ　貞徳

△建蘭（らん） 数十品あり其佳なるものハ價大ニ貴し葉長く麥門冬ニ似て一二尺花ハ莖を抽で数花開く蜂ニ似たり

(俳) 藤はかまや茶抄削て昼眠る　巴静

きる者とこそ喜を茶色ふ　才九

(狂) 蜂に似よく尻てさすなれ藤はかまれハ前のそはに匂ふなるらん　喜文

△女郎花（をみなへし）

いにしへハ大ニ翫びしとなりこの根敗醤のにほひなる香ありて花ハ人のよく知る処なり哥によむハおそく女ニたとへて戀哥に尤多し ○俗敗醤と混せり偶よく似たるを以て誤まれり敗醤ハ弄花家羽衣と云花也

(哥) 古今　僧正遍照

名にめてておれるはかりそ女郎花われおちにきと人にかたるな

○此うたハ遍照か奈良へまかりけるとき男山にておみなへしを見てよめる

千載　女郎花随風　雅兼

ともすれはなひくとこれハ秋風の

吹朱ろ未もるりうきゑ

連　とし良しこてりろ人も臣　紹巴

俳　ひろ〳〵ぬ〳〵やめ〳〵ね芭蕉

仰ひまどりて臣　呉や奈ね后里

茶の花

とゝ良ふ少しい似

べ〳〵ろこと覚束臣　な万葉

ふ男べゝるどいゆうる哥あし

どもこれとそてよの一哥ともき

ろへを又茶の字義もさゝる

ず按をろふ女郎花ふ白を花も

あまゝどそれとをとこべゝといる

ゝや爰ふい先俗説ゝ志さゝび

茶の花ゝ志さかゝり

俳　れゝるふれゝとゝや男べゝ百外

男べゝとそもゝ其十

狂　男へゝとゝる臣ゝい似もせいて

いるゝ人のゝ系あゝゝや貞史

仙翁花

一名　紅梅草ゝ出州

花の形がんぴふ似す

蘭塩草　如のふ紅梅ゝの花れい

ろのんとゝ志せつゝう邪

俳　紅義花ゝ志れのゝやくまい入安

観音州

形藥須知ゝ説

祥蘭と昏ゝう

花いうすゝ〳〵さゝ藍と名

さんで〳〵穂をるす

俳　れゝ〳〵いゝ大ゝ多ゝそ観芳中　珠明

翁草

初春苗と

生ゝ葉麦

門冬ふ似て甚白く白髪の如

し故ふ号く　花秋へ三ゝ図會出

散木集　俊頼

ゝの辺の人ゝふゝ〳〵義ゝき

かゝゝれゝゝるゝきゝそする

俳　れゝゝの枕ゝ歌ゝ志　三惟

弟切草

漢名　劉奇奴州といふ

元秋ゝう出す又茶

師草○青茅○花小黄ゝう三

稜の莢ゝむゝび中ふふゝる子

あり○青茉又茉師草と名づくるハ此草金瘡の薬なるが故なり劉寄奴なるれと是れども茉能ハ一ツにして花葉異なり

哥 鷹百首　定家
「秋の野にまじる枩のこかげ茉 知ふて飛るやさしねるらん」

俳 まじりさよ忍ぶれ窓のこかれ茉　五嵐

妙薬 疝気にハ陰干にしてせんじ用ゆ○血をとめ切きずにハ此葉を陰干にして粉にし油にて練り付る○此葉をもみれバ汁出るを一切の金瘡又ハ腫ものにつけてよるなりご妙なり

益母草

一名 茺蔚○茎胡麻に似て葉ハ麻に似ふう節々に小花を開く実あり婦人の病に功あり故に益母といふ目を明らかにし精を益を故に色きの名あり

萩

○波木△糸萩△白萩△小萩△胡枝花○天竺花 花史

異名

和名 △古枝草 蔵玉△鹿鳴草 和名○初見草 蔵玉 庭見草 蔵玉 月見草 藻塩 野守草 同上

冬も茎かれどして春葉を生ぜるを木萩といふ。冬葉茎ともにかれて春新しき苗を生ずるを小萩と云 大和本草

△糸萩ハ花紅なり△白萩ハしろき花なるべし奥州宮城野に萩多く生ふる山なりその其内にハ白花あり又白紫咲まじりなどもありとぞ其外詞の所に△印あるハ季に用ゆべし

哥 続千載「我袖ハ萩のうへにや代ゆるなるそよぐかぜに露こかるらん」　俊成

玉葉「乙女らがかざしの萩の花のえふ玉をかざせる秋の夕かな」　為家

藻塩「世の中ハうき世を花を野中に折りふ猿を帰りしつらるる」

蔵玉「奥城のこずゑも色ある古枝とし秋も花ハ咲なり」　西行

詞 咲。匂ふ。ちる。うれる。風ハ。花ちる。
落葉ばら〻。霧ハきり。れ雛の秋萩。古〻ハ
古里の萩のすき。衣ハ秋萩ノ花とう。
萩ノ花をう。かざしハ乙女ノかさ。の萩。
萩の露 萩の葉ニ玉ノ如キ露ヲ見ル。秋ノ
萩の露ハ。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
萩の滝 萩の葉ニ玉ノ如キ露ヲ見ル。秋ノ
萩の滝ハ。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
女郎の萩 萩の古枝ハ。ほろ〻。ほろ〻。
枝〻。もこ〻。ほろ〻。ほろ〻。
あまべ小手毬を女郎の小萩ト云ふ。
嘉 萩ハ。あまを。ほろ〻。ほろ〻。
うハつも。嘉ハ。ほろ〻。ほろ〻。
月 萩ノ。ハつも。嘉ハ。ほろ〻。ほろ〻。
七夕 七夕ノ。七夕ノ。ほろ〻。ほろ〻。
庶 萩ハ庶ノ書ト云ヘリ。庶ハ萩ト。ほろ〻。ほろ〻。
庶ノ花書。庶ノ志。ほろ〻。ほろ〻。
恋 紫ハ。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
禁中 萩ノ戸。萩屋。ほろ〻。ほろ〻。
季〻。秋ノ三十日ヲ出
哥 あ〻き風。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
連 ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
萩ノ。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
俳 白雲。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。
萩ノ花咲ト云ふ。ほろ〻。ほろ〻。芭蕉
萩ノ。ほろ〻。ほろ〻。ほろ〻。禹洗

鳳仙花 金鳳花 又ハ。ほろ〻。

花ノ。ほろ〻。花紅白アリ。
花ノ。ほろ〻。飛鳥ノ。ほろ〻。ほろ〻。又鳳ノ
ほろ〻。ほろ〻。物ノ骨ヲ解ヲ故ニ
骨ぬきの名アリ 三才圖會ニ出
俳 鳳仙花酒ノ型打ヲ。ほろ〻。春ノ
詩 鳳仙花詞 無名氏
細見金鳳小花叢貴盡同
花染作紅 ヨク〻コノ花ヲ。ほろ〻。
ハナガアツ〻ツテ咲テアル花ノ色ハウルハ
ミイベニヲオシヘズツイヤ。テコノ。ほろ〻。
ウ染タモノ 雪色白邊袍色紫
テアアラフ
更饒深浅四般紅 ソノハナノ中ニ
白イ邊ガアツテ大臣ナドノ。ほろ〻。
ムラサキノハウノヤウナトコロモアツテ
コイトウスイト四色ニソメワケタ
ニヤウズノ手キハカ見エルゾ

旋覆花 野徑の水溝乃邊

多〻。ほろ〻。大ほろ〻一重ノ
重瓣の。ほろ〻。の甚少〻。ほろ〻。せんへの
物ト号ケテ水慈童ト云花

へ野菊の黄なるがごとし

異名 滴露金○野油花

野菊

鍬耨高又野粉團と
いふよし名葉に似て莖か
〜 救荒本草に出又春はよもぎと
いふよりの秋花さくと野菊とも云

やいと花

葉女菓に似て花も
筒さゝれなりやう〜
かるうしるくさきう小花いろ
白く内をこし〜紅し小児この
これの莖つきのかるが上ふ
て身にあて〜灸のまゝをする
はよく似るゆゑ名づく

俳 これも天竺母の恩あるやゝ花立圃

曼珠沙花

和名 天蓋花○燈籠花 漢名 石蒜

異名 烏蒜○老鴉蒜○水麻○
蒜頭艸○凄々酸○技箭○葉
は胡のかゝるやうにして〜花は莖を
ぬきんて五六朶いろ〜なるなり

ひのうし紐をむすびあがあとゝ
俳 ものゝ結ふに思ひ乱れ人心其十

常山花

葉は梓楸に似て
ひろく甚くさし
六月花を開く七月ふに此虫
をとるなり常山〜に苗乃名
蜀漆は根の名なり
俳 見てそれは為ふの花も忘れを 李坡

頻桐

○ひさうの葉大きさ五
六寸ありて皺あり

莨菪子

和名 ○かゝうい

止止柳

渋柳所々ふあり○渋取
法又渋紙の仕方ふ
しく日本歳時記ふ出ぜり
俳 渋ぬりや仏名の栗もしをん岩翁

茗荷花

七八月根のかさりふ
子と生ぐ即花なり

麟金花

異名 王金○葉は芭
蕉ふ似ざり花白

質紅ゑん深色ふかきもの花ハ多くこのもうふ似て甚大なり

俳 ものもいはぬ花ゆゑ恋ハ思ひ草　ものもいはぬ花ゆゑ恋ハ思ひ草

薏苡

仁ハ穀のごとし粥と

とぎ搗きて食ふ又ときて念珠とす也

いうこの名あり実ふとり

て季子ごとし

俳 今年糸より出る一番茶と苡粥　王瑞

蒲萄

異名 蒲桃　草龍珠

○北国ふるくハ蔓ふ

て棚を延ふ実を以て季子

二種あり一種ハ多びらづゝ云

紫葡

多びらづゝハ山葡萄と

いふものうり袍の色

び色ハ此りの紙以て染る物

なりとぞ但し葡萄ハ実乃

名なり紫葡ハ樹の名ゑ

一種の別名蘡薁といふ。

ヨビ〳〵ハ酔ふるごとの

実の色ふかきくいろ

俳 紫苑とハ桃へあのうるはしく野坡

紫苑の実ハ爰へ生れし葡萄哉 地高

詩 仝七字對句　詩礎

雨来枝上清泉沾　アメキタツテシヤウセイセンホモ　アメガクツテクレバエダノウヘニキヨキ

露重稍頭紫玉垂　ツユオモシテヤウシヤウシギヨクタル　ツユガオモケレバネノウヘカラムラサキノタマガブラサガル

水晶明珠重　スイシヤウメイシユヂユウ　スイシヤウノヤウニキラツク　タマガオモク　サガルヤウト

妙術　蒲萄を束の根乃かゝれ

栽て春ふいくう其束の木ふ穴を一

あけぶどうれ枝をさ〳〵二三

年を経て枝ふくう長くうりて

束の穴一ぱいふ満うるとぶどうの

根を切るされバ束の木の樓木と

なるうりよく生長して実を多く

むとゝび肉厚く束ねと味美へ是秘術

桃子

異名 仙菓○蟠実○三偷

○洛陽路 種類 碧桃 白桃 桃の花

○早桃（五月の毛桃）　山中の冬桃（十月ニ成ル）　西王母の桃の類ニテ
○霜桃（同上ニ成ル）

日本にいろ〻此外種類多く又異品多くして大きく一抱にも及ぶものあり

（俳）桃の実の紙ぶくろ　蓮ニ
梔つゝ桃の花又やたゝ老の素一

（狂）桃原ふるうて咲くる花ごとに
こゝあひのんちうそとれ　貞柳

（詩）桃子五字對句

顆々粧霞媚　王母千年実
ヒトツヅツカスミニヨソホフテウツクシク　サイ王母ノ三千年ニヒトタビ三ノルモノゾヤ

嫋〻帶露肥　秦人幾代孫
タヲヤヲビテツユヲコヘル　シンジンイクヨノマゴ
ツユヲビテコエタリ　ゴノスエニテオルハタノモノゾヤ

（詩）事類賦

○果實多品惟桃可佳夭々其色　詩経ノ語ニテ花ノ見ルベキナルヲ云ヘリ。スベテクダモノ多シト云ドモモハ其中ノダイヱンジ
灼々其華

○為仙益壽　仙トナリトハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ　壽ヲニストハ東方朔ガモモヲスヽタル故事ニ

○或制而袪邪　桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云故事和漢トモニ多シ
○或美后妃之德　女ノクダモノ桃ニ比シテ云故実多クアリ
○或報瓊瑤之華　玉ノカハリニ桃ヲヤラフト云フ故事アリ

皆詩経ノ故事ナリ

桃子故事

三偷

漢武帝ノ時東郡ヨリ短人ヲ献ス帝東方朔ヲ呼ンテ見セシム短人方朔ヲ見テ曰王母ガ桃ヲクエテ三千歳ニ一度實ヲムスブ此人其桃ヲ三度偷メリト云ヘリ　漢武故事ニ出

青花

山海経ニ曰磅礴山ハ扶桑ヲ去ル一五万里日ノ及バザル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千圍其花青黒シ万歳ニ一度ミノル

木瓜實

（異名）鐵脚梨○楸

蜀ノ是ハさしくクハリンの種類にて實も大体ハ似うり又多くあるりのい檀子そ

草木瓜ようり林擒の
ゞゞいづまも味酸ー

槐花

六月末より七月ふ至る
黄花と開くより秋む
の木は種類るて巣い夜る眠るく
唐土ふいふ槐と植て其下に
て訟を聽ーと云日本にても
其遺風と志さい大臣の別名
と槐門と云
く呼ぶなり大納言を亜槐

詩 槐花五字對句

畫影籠青禁縣古蟠根出
日中ノ巣ノカゲハキン ブルキヲタニハフダカニツタ根カイヅル
秋香拂紫宸城荒細葉殘
アキノハナノ白ヒハレレン テンヲンテフ シロカウハラ レレンテ サイヨウノコル アレタルレロイトニハコマカナ ハガノコツテアル

槐之故事

植三槐

事文類聚ニ曰王晉公拓手ツカラ三
槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラ
ズ三公トナルモノアラントイヘリ

累レテ然リ天下三槐ノ王氏
トハイヘリ

蓮子飛

蓮の子と蔭とよ
房の中ふあり此と
ろ自ゝ飛んで水中ふ入
能 蓮ハ実と為ひるゝも陸ふ為ク 能州
狂 扱ホも サゝ今めて蓮墓と
くるれて人と為ふ為ク宗惠
詩 蓮子詞 東坡
綠玉蜂房白玉蟬折来滯
露復含烟 三トリイロノ玉ガ蜂ノスノ中ニアリテ折テ
醉嚼新蓮一百圓 玻璃盆面水將底
アルガコトク見ユルヲ醉テ百ホドモカミタリト ハリノ玉ノ盆ノ面味ノ汁ノソコニ

刀豆

一名 挾劔豆。葛豆。
唐い赤ー日本ハ白ー
莢 夢草より
能 ねさひて往むるく互の姫松 宗因

夕顔實。瓠。壺盧。ひさご　も花白ー

(哥)未木　夕顔のさくはなはむなしき名をやはさて浮世のこゝろ人もさくらん

(俳)瓢簞は月を愛ずるの器ひさごは酒をいひ号けあり　生瓢考

青瓢簞　これ右ふ地ゑー生ずるあをごとの　あさふべ

いろとゝのう世俗ふ青瓢なるふ人乃面色ふたとへう

(狂)病む新と書瓢簞と云ふ乳病疾病をも貢へー　貞丘

西瓜　此種い元西域より傳へうて唐土にも漸五代の時より始まり日本い慶安中黄檗隠元入朝のゝ種を携へ来りて初めてながさくるへうへう寒国ふい生ぜず

(俳)出女のに紅おしむ西瓜ふ支考　時明ふ法ムゝ世ゝ西瓜ふ宗因

(狂)赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ赤ゝ西瓜ふ　海音

妙業　衣服ふ名ゞこのやふれつゝゝゝ落ちふよー

このこと　近世畿内ふ種を

うーゝふ味西瓜ふ

似て美るゝず虎のうへふ稜あり葉い蓮の葉ふゝゝ藍の中空ふて蜀葵のごゝ

(哥)なにこれまぜふぞゆへるあゝと瓜ふ色つゝるゝ名をもゝひつ　西行

(俳)あゝゝ瓜又水義人の後ゝる　基中

棗　壺束い上とゞる○要束い大日て腰細ー○擬束い小うて味酸ー此仁と茱物ゝもう漢土よい数品あり本邦ふい少ー

(俳)針ゝ花に星ふ綿へー　串ふ露州

(狂)ちへうて実ゝ屋ゝれい蛇ふ変ゝるゝめゝゝゝゝゝゝゝゝ　遊糸

ひやつゝめ　関刺

詩　棗五字對句

甜出諸餳上　今作中州瑞
アマキヲハモロ〳〵ノアメノウハニイデ　人ノデハ中ゴクノヨロシキモノトナル

香居百果前　元從外國傳
カウスクリ上クスクリ上ヘニ　モトハヨリ外イコクノ
カウバシキコトハサヲ〳〵ノ上ノ　モトエンゴクヨリツタヘ
モノ上ニオクベキモノニヤ　キタツタモノニヤ

詩　棗　詞　五言絶句

北園有一樹　布葉垂重陰
ソノ二一本ノ木ガアルガ一メンニ葉ガ
ヒロガツテカサナルカゲガオホヒカハヤウナ

外雖多棘刺　内實有赤心
外ニイバラノハリハ多ケレトモ内ニハアカキ
アヽキ心アリトナツメニタトヘテ人ノ外
見ハニガ〳〵シクカラクハアレトモ内心ハ
清キコヽロナリ赤心ハキヨキ心ヲ云フリ

粟穂　種類　秫。粱。稷。稗。又粟
奴しつゝあり　下品なり

哥　万葉　ふる振袖の社しるうせい
去日の昨へよあとまうかはゝと

西氷故事　生顧　神代巻　保食神のひ
ひる生どろと見さ

少彦名神
神代巻少彦名神い
甚短小の神なり
大巳貴命と共ふ国造りましく
終ふ淡路島ふ至り粟茎ふ縁
のぼり茎の立生らるふ弾られて
常世の国ふ飛去りなりと云

稲葉の雲　稲の葉ぬそへ
おく〳〵見ゆる雲をいふ　ちぎりて雲乃

秋風い田面ふ靡ける波
いなのまふ寄ふ来ふ遠茂

稲の花　異名　富艸の花
水影草

夫木　後久我内大臣
夕全いくやまみ巳ふ我宿乃
門田のいなの波乃若よる
うちむまて小金のふつむ恐ハ
そをる世のさミ若の花　人丸

俳　若ゝやとゝ〳〵毎ふいひの花　五葉

△早稲（わせ） △早田の稲 △さきいね ○はやくみのるいねを

㋕万葉 石上ふるのわさだをひでずとも縄だにはへよもりつゝをらん

㋭わせはまや伊勢の聖は二日より 蓮二

〔早稲の香や分入右は有磯海 翁〕

△室の早稲（むろのわせ） 顕昭の袖中抄に曰むろは早苗なり むろはむろ咲ともよくきこえむろのわせともよむといへり

㋕堀河百首 [illegible]

生類

七月の生類を集むといへども ㊇㊈如此印しのもの八月又九月にも用ひらるゝものなり

△初鷹狩（はつたかゝり） 三秋ともに △小鷹狩 △初鷹狩 △初鷹。むらし 公

初の鷹狩なり 冬は大鷹にて大鳥をとる 秋は小鳥狩なり 小鷹とはいふ。○雑談抄に小たかは雀鷂。雀鷁。小隼。鶻鶴など

なり○貞徳説に鳥屋出の鷹を居て初めて狩するをいふと 初鷹といふも同じこと

㋕夫木 箸たかのとやのあさぢふみわけておのへもかへる狩の狩人 順徳院

〔はやぶさ鶴とるふるへおのゝ雛かへりとけ見すしつ 衣笠臣〕

㋛すゝかり。ひもきりひ。ゆける。落さし。こかえり。つかさかへまもり。座とる州。山かえる。身よう。もれ。よな。らく

る。家ゝは○歌には秋の部に入れ 義は[illegible]

㋹ゆふはそらの秋のあしらひ 周桂

〔あすもみれはの小鷹狩 宗祇〕

㋭棹すてゝ[illegible] 立甫

〔お輿の[illegible] 後白〕

㋖[illegible] 木葉

△鷹打 山中ふて鷹と捕を鷹打と云そのたを折おろしとゆ〇多くハ伊豫の國にそとる

△荒鷹 鷹と捕ていまゝ人なるしざると云則とりたるまゝの鷹なり

(俳)蠅ひゝ荒鷹の其角

△鳥屋勝 四月より羽毛と替七月上旬まで羽毛と元のおゝくかゝる鳥屋なり片鴨と云二年めと兩鳥屋なり兩鴨なり云三年め兩片鴨といふ初より毛羽毛全くそなわり勢よくを鳥屋勝といふ手間会出

△鳩吹 手と口ふあて鳩のこゑを真似してたゝかるるなり 袖中抄に出を

(俳)旭ふをやをゝ山の尾下 甫山

おのゝをゝ鳴なくせやすゝ好忠

△秋蛙 秋も鳴く蛙へ (俳)人新 蛙なる秋のあとなり 桃青

(狂)松蛙か手ゆ蛙ゆ水ふるく蛙の秋乃夕月 負柳

△秋蠅 (俳)風ふさたの窓とうゝくや物の慳 鬼貫

△秋蚊 △溢蚊 △殘る蚊 (俳)ものなや呑一面よこ通 香蚊

△秋螢 鈴鹿箱根ふの酌 溪ふハ八月北まて沈山

ふ螢あり併るゞ冷気俄ふ至るゝ紅い螢ゝる消て

〇蚊蠅螢の類夏の部ゝ異名等くりくあるす惣じて秋へのる虫なり別ふ子細ゝ

(哥)ゆく螢雲の上までいあへハ秋風ふゝと扇ふつあゝせ 業平

(俳)ゞ退や螢も秋の天の乃入重

秋蟬 漢土ではすべて蟬を秋のものとす

(ろ) 拾遺 神なびの山の蟬の鳴くなれば秋の初風ふきにけるかな

(俳) 月は色なきもの鳴かぬ蟬の木の葉の日は差さぬ桜の北ところ 許六

(狂) 元禄なまくさ みーんな秋の日ばもきくなり 一東

(詩) 秋蟬五字對句

客老愁城下 小池兼鶴浄

・旅人が年ヨリテ遠国ノ城下ニモノ思ヒスンデ居レバ

・チイサイ池ノ水イロハカタハラノソルノ毛色トヒトシキ

蟬寒怨路傍 古木帯蟬秋

・アキノセミモサムソウナ声デミチバタニウラメシソウニナク

・古キ木ハセミノ声ニヨツテイヨイヨアキノムシキニエル

(詩) 仝七字對句 詩礎

萬頃白波迷白鷺 落日中

・スエトヲヲキナミノ上ニシラサギガ

・ヨコヲテイレバ

一林黄葉送秋蟬 不知秋

・イチリンノクハウヨウカクルシウセンラ

・一ツノ林ノイロ付タ木ノハガ秋ノ

・ヒとラアキヲ

・アキトモシラズ

セミノ声ヲ送ルヤウニチリカヽル

噪暮蟬 蟬声驛路秋山裏

・ヒグラシセミノコヱサハガレイ

・ロレウサンノタチ

セミノコヱヲキクタビノヱチハアキノヤマノナカニヒヤ

サウレヨクカキヤクラクゴウクヌキ

草色河橋落照中 漢宮秋

・クサノ色ノサビシイ河ノハシガ

・キウキウノモノ息

ユフ日カゲノ中ニヱエル

・フテキルアタリノアキノケレキ

蜩 一名 蟬 異名 蜩 蟬の種類。黒色。

或い青紫長さ一寸ばかり此せみは夏鳴く俗ようつくしようと鳴

といふ故にせみもなくれども初秋よへば

(俳) 秋ふる揉ぬも淋しきうす素夫

茅蜩 異名 〈寒蟬〉 ○茅蜩 ○つくつくの蟬より小さくて

青緑色の山中にあるて晩夏

色なり依て名づく寒くなる

尚ようくなく其声聞くに堪ず

(ろ) 夕立の雲もなかるる夏の日

かくふく山の日ぐらしの声 式子内親王

○古歌には夏に読む連俳は秋に

(連) 日ぐらしにかげろふの庭 秋の家 肖柏

(俳) 日ぐらしやねらひそふ秋寺鏡 鬼貫

△秋胡蝶(あきのてふ) 毛虫(けむし)或ハ芋虫(いもむし)などの化したるものなり

(哥) 源氏 花ぞのゝ胡蝶をさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらん

(俳) 蝶〻や今生るゝは菜の末 東坂

「菜園の花にかりねや秋の蝶 遊三

(狂) 見るもあはれもせぞ秋の菜畑あやうく蝶のまひぐそする 携賀

△田畑虫送(たはたむしおくり) いなご送るともいふ 田蝗害をなさんとする時農夫大勢むしのかくとつくり鐘鼓を鳴らして野外に送る又ハ松明(たいまつ)を照らして田中で呼はるもありむかし陰陽寮(おんやうれう)に命じて船岡山にまつりしもあらし事あり

△蜻蛉(やんま・とんぼ) (和名)ハアキツバ△胡黎(きやんま)○エンボ○トンボ△アキツムシ

△赤卒(あかやんま)△赤とんぼう○あかやんま○色やんま○いなごも大小ありて色を異にするのもありやんまハ古言にヱムハといへり通音なり

かげろふハ元陽炎(かげろふ)の名なりこの虫水辺の日かけに飛ぶがゆへに陽炎の名をかりけるといへる秋つむしといへるハ惣名(そうみやう)にして古名なり次に故事あり

○胡黎(きやんま)俗にムギトンボウ大にして其紺(こん)なるもの紺と名づく俗カ子ツケトンボともいふ

○古哥にかげろふとよめる二ツあり一ツハ春の糸遊の事一ツはこれむしの事なり

(哥) 後撰 秋はねのとこのはに結ばれし袖のちぎりやワクきえしのこと

(俳) かげろふや茣にとまる身やんまかな 翠青

(狂) かの尾を継ぎにて一もとに川尻ひとつやんまなるかり 廓素

詩 八七字對句

風定纖枝堪綴足 相逐戲
雨来密葉好藏身 闘高飛

蜻蛉故事

蟹呫

日本紀神武紀 秋
一年夏四月巡幸
あきつしの脇上の嗅間丘に登り國
の狀を望ませ給ひてのたまはく
あぁ美しやこの国を獲つる内
ゆゆしきかな国といふとも猶蜻蛉の
蟹呫せるが如しとありしこと
日本と始めて秋津國といふ
○とんぼは此むしの尻をくひ付て
さもに飛ぶなり

虫蟲

△虫の音 △虫の声。虫の題
△秋 ふは松虫きりぎりすをのぶい
次ふ記す分いろもあり

哥 夫木

花山院

とりの合せ多く出の方紙さらに
ひよそそ手をうる社のもりへう
家集 月前聞虫 清輔
ひもあやふきあるを雲れ月をふ
さてをうつる出れてをうる

新後撰 野虫 為氏
秋のつゝさ拾ってをうくを
うるさいの人乃多に鳴ふん

亀山 庵虫 為世
神奈なうる麥のいほりれ夕つゆふ
雅よりの人とうる松むしのすく

詞 ちゃう。ちゃふ。ちゃふ。
ちゃまる草のムさむう。麥かまし。麥
の穂ばけを蓬ゝをもれる屋。をりそが
菊 淺第ニハ あさちが系。庭のあさち。
あさちふ 垣ハ ふさ 垣ハ ふさ 垣ハ ふさ
ふ。鳴あ子。秋を鳴。せき秋
をう 拙ハ 拙ハ 拙ハ 拙ハ。
拙四へうう。拙ふうう。床ハ 床近き
秋蔦の松 月ハ月の秋すう。夜鳴を

露に命を惜む。つゆとよんだ。義経記。

霜　秋のまゝ　風に秋色の風ふきぬ　秋のまゝ　秋色もさとのゆひくべむ。人まろ

蟋蟀の声もうく。ひとり秋のかなしきあり。

連　風や秋深くとしき虫の声　肖柏

俳　元禄の秋のまくれ　虫の声　其角

詩　虫詞五字對句

砌冷蟲喧坐　客愁連蟋蟀

タビ人ノモノオモヒハムレト思ニフカフナリ

二カヒヤマニナハムンガヤレキニアカツイラヒキリニテク

簾疎月到床　亭古帶蕪葭

スダレニヅラヌツキイタル　テイフリテオクカンカマ

スダレガニバラニナレハ月カゲモ　チニガフルビテアレトヒトツニナル

ヒキリニカニテサンコム

詩　虫詞七言對句

蒹葭曙色蒼々遠　夜沈々

ヨガレンシクトフケル

ケンカショショクサウ〳〵トホク　チン〳〵

ヨアケノクニキガアヲクトーヲクヒエ

蟋蟀秋声處々同　月色深

シツソツノトウ　ゲツショクフカル

アキノムシノコエハイツクモオナジヒカリトニキヲヘル

詩　礎

忠頼

虫撰　昔い殿上人さゞ野をど遣しなひて虫とゝ

らくもひ一ことあり○松虫　鈴虫

の類とゝ〳〵こゝ加茂の社司よ

り奉り〳〵事　禁秘抄に出

（雑）年中行事

いろ〳〵ふさゝ物の虫と交人乃

花をう衣ゝてそゝろゝふ

虫合　上ふ同し　俳　紀一さいそれ

ゝれくゝすむ〳〵会　北虎

虫盡　殿上人乃虫合のこと

平家物語ふこの語あり

虫籠　今も猶加茂の社司よ

いづるゝの奇工目

をれどろをう

（俳）虫籠や屋ゝて秋のゝるゝす　野水

虫賣　（俳）むし一うゝいせ〳〵ふ

うゝせてゝゝろ　樹公

轡虫

○蟭虫○鳴く声　馬のくつわの音

小似〻う故又名く。松虫。鈴虫。
轡虫の三種人々其音を賞す

哥　山家集

おもひつる人をわれのゆふされは
あらはてさるる轡むしの郭

△月鈴虫　○金鈴虫とも云又月鈴児とも云色黑く少〻黄く音ハリ〻こくこゝる

哥　夫木

きくとなしうしのふもとの草むらの
神禾の宮はたの声　範光

詞　うり出て神ゐる山　轡むしの

連　なきはて声やかれの器の古　紹巴

△松虫　蛬とも云其音ハチンチロリンと鳴く

俊頼

哥　散木

夕されは野へのをしなへ露をおもみ
松虫なくなり家もあれはて

狩　家集

むし供を。又切まても。松虫ハまつのとゝいふもろもろて
△人まつ虫。雅集

連　松虫も風ふるく秋の声　宗祇

俳　松虫ハ鼓をもてはやすの友静

○こゝ虫松虫の異名又一虫
うりもいひ又松虫ハ声清亮又
しゝ〻〻〻と如く松の音ふ
似て松虫といふ○謠曲
野の宮の鬘ふ誰まつ虫の音を
んくゝうて風范々ようとうく
へ松虫ハまんくゝとうくすや又

狂　たさくゝとなくこゝる。赤湯のろぢ杵下ゑ
右の外説多〻上ゑ圖もる所ハ
畿内ゑて人家籠の内ふ養ふ
処〻尚國々水土ふようて大同小異有

△蟋蟀

一名蒲雞。くゝ丸
○そゝつ虫。ちゝろ虫
其音キリ〻スと鳴く二声三声七
舌つゝをもるゝ　奏〻くハ七月ふ
○順和名鈔曰蟋蟀一名蛬。本
里木里須とよゝ加茂真淵の説

まの蟋蟀の石巣ふ

(哥) 秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本乃蟋蟀鳴毛

とよくしるふよれい和名抄ふ蟋蟀をこうろぎすとよくしるふ誤りなり

(云) 夫木

庭なかふむしのこえさめうてきくくすなくあきのけいきふろ　惠慶

雪玉　早蛩鳴復歇　為氏

ものかれる初秋風のこうろぎもまくら床をこそあはれ

(詞) 山蟲。絲蟲。蚰蛛の家。柳のもと。くさの陰。

(連) きりくすはぬよりあるあきけれ肖柏

(能) 常灯や蛩ふくくす嵐雪

促織

一名 斯螽。翅織。俗ふくくすといふ

蟋蟀　もちとさうしいくも此斯冬蟲　もちとさうと云へ蟋蟀鳴声

もちとさうと如くキリくチョンとなく故音ふ依て名づく此斯冬蟲ハ狀乃俯仰ふよりて名つくるく

(云) 金葉

そさあるむしれもあきこゑ　為氏

(詞) 声のあくと徹る。そこ徹る壁の穴いそく。蚤ちてこ。萩のみさ。蛩のたて蚤のぬさ。蛩ろる。山の陰

蚣蜻

一名 蜻蛉。形蝗ふ似て光あり翅角あり夏生ー秋ふいくて鳴へ三才図会ニ出より

○蜻蛉。古保呂木ありしく順和名抄ニ出

○千梅の説ふいいとかれろさ一物と云

(能) ひれろさやそれひ蛩ふ一樓山

竈馬

狀促織ふ似て稍小く脚長く好んで竈の傍ふ鳴故竈馬と云

漢名 竈雞。好事の人是とキリくスと考へ誤へ

(俳) ちりのハはきあれ衣ふいくくい　来雨

掃の柄ぬくれて鳴やむいくふ　馬黒

○こゝろぐさ。こゝろ。これらさの三虫同類みて和漢ともに弁別諸説ありしかし詩経に五月斯螽動股六月莎雞振羽七月在野八月在宇九月在戸十月蟋蟀入我牀下とあり朱子注に三虫一物にして時々変化して其名を異にすとあり

稲虫 八月稲の穂に委しやすきなり多分七月なり

阜螽 此虫性不嫉雄虫数虫を つるむ一母百子故に五百子式又此虫一夏に子を百生ずる故に五百子云

(俳)門前の美しく進むこゝろ虫乃至一

蕉虫 (俳)蕉虫乃至一 紫や小舟 友静

蓑虫鳴 (漢名)蓑衣虫○織草虫○壁債虫○木螺○このむしゝといひて々季ともいふなり

れは秋く清少納言の詞を風の音聞知りて八月そうにゐるきゝ父よりいとこゝろぐさ

(分類)**蚯蚓** 秋風にあむみのむしの声 叔蓮

(詞)をろぎの古名 (俳)この虫なくと世に来さ老の声 こやん

馬追虫 田家にては人家近く鳴く声牛馬を追ふがごとし

稲蝗 ○叩頭虫又ゐろぎ虫ともいふ又そこなくもいふ 古名イヂコ形緑色にして頭尖り社人の烏帽子着るに似れは俗に称宜として又両足の高さとなれい身と伸して稲を扱くが如く動くなりゆへにつき虫

藻鳴虫 藻住虫の音。部俳ふるこゝろと多くよ

ゝう藻に付て殼の一片なる螺を
見うとゝいへい分殼の意なるべし
○又刈ざる藻に付て居て此虫我が
と身と亡を故に名づく　古今集雅部
奇なる多くあれども読り
(芭)古今あやめかるほ沼の我ゝとも
我とてなるあるべき世とかは　典侍
(俳)見ゝと喪に行人の涙なる嵐雪

蚯蚓鳴　(異名)蟋蟀○寒蛩○陽頭○土龍○歌女

みゝをい目不見の訓なり鳴く
撃ゝるなど清く笛とふくべし
雨ふれい出る晴まい必夜鳴く
(俳)秋まるかよい参て今ゝまい鬼貫
(狂)わるいゝふいゝ〳〵れ考ゝ紙をへて
うなゝゝすの枕もよい愛　舊晋

蟷螂　(異名)拆父○蝕眈○蒲
蚣○不過○斧○好んで
眈とろ故ふいゝおむーとの名あ
る畧していゝるべしとも

(俳)さゝゝ移ゝれそゝな蟷螂や左来
横刀清御ゝ斧紙の関金波
(狂)蟷螂ゝ斧とふりは戦場ゝ
たえすもとゝの芝の赤ゝと流半

蟷螂故事

拒車　齊ノ莊公出テ獵ス蟷螂車の音を聞テ斧ヲ振テコレニ向フ莊公コレヲ御者ニ問フ答テ曰ク蟷螂ナリ此虫進ムヿヲ知テカヲ量ラズシテ敵ヲ軽ンズルモノ也王曰コレ勇アル虫ナリトテ車ヲ廻シテコレヲ避ケタリ四海ノ勇士勇ヲ賞セラレタルヲ傳ヘ聞テ三十齊ニ帰シテ国甚強シト云々

常山虫　此虫小児のやまひにてなりぐ益ある

必用

七月一ヶ月要用の事養生天気食物料理

樂事　風涼ーゝ快ーー○虫の音あいまいちづゝ

ものふいあつさのうしもタけよ
を夜ふうそふくハ此月さゝに
よゝ野へ迄ゑ出て稲の穂露ゑ
うるふひ稲の穂の出て青々と
て風いそよゝのぞめハ平々さゝて面白ー
けーきこ遠く

破軍向方

夜九ツ 戌の方	夜八ツ 亥の方	夜七ツ 子の方	
朝六ツ 丑の方	朝五ツ 寅の方	昼四ツ 卯の方	
昼九ツ 辰の方	昼八ツ 巳の方	昼七ツ 午の方	
暮六ツ 未の方	夜五ツ 申の方	夜四ツ 酉の方	

日刻 ○未日申日○未刻申刻事ゑ
日ゑとふ用ゆへゝず

方角 ○家普請他行東北の
方ふ向ゑて北ゑ南ゑ太凶ゑ

天氣占候 卯の日三ツあれ
ハ稲よく熟す

月の内ふ虹あゑハ米とゝめ
野菜まで也ゝろーかゝ

衣服式

帷子を着ゝ當月の式ゑ袴ハ鶸色ゝ

萩重 表ハ裏薄紫 **花薄** 表長裏白

裏ゝすゑれいろゝ
上つゝさいハ右の色を召ゝふゝ

女衣服 白帷子を着ゝ上ハ白あげの
かゝさびゝに根の葉ゑ赤ひい草
のゝとゆゝまゝくい萩萩ゑ
ゆゝものゝうえゝるゝりゆゝにもゝる

養生

夜漸くひやゝかゝ
衣を厚くゝ涼風ゑ
やゝぶゝゝ事ゝるゝ夏の間ハ
勝理ひゝけ表気ゝすくゝて
風ふ感じやゝ或ハ感冒傷
寒疼嗽喘急の病ゆゝるゝ
慎んてこれとさくべゝ
○此比ゝるすびの根をゝゝ
刻みせんじ凍疥を洗ゝ

飲食

七月一ヶ月の食物の類をあらはし出す

△焼米 糯米ハ青稲を炒り碓にて搗き籾をすて稃を去れバ米ひらたくなりて味甚美なり 糯米ならでハ味劣れり 蜻蛉日記にやいごめとあり

㊕ 焼米やきこんでもらふ檜の脚 雨更

△切麦 △めん麦 △あつむぎ○ひやむぎ 夏ともいふなり六月に出す

○ひや麦ハあつしへいへいなる物なりハ細き温飩とひやし喰ふを まさに詳ならず 今ハひやしたるへしらるゝ又ぬる麦ハ冷ざるをいふか おゝしある切麦ハ煮てあつきといふなる職人哥合に

㊄ てうさいのこうきの上のあつ麦ハ むしあけのせられ月をそへるなる

○むしあけの瀬戸ハ備前国なり

㊕ 切麦やおしならべたる膳の上 蓮二

七月飲食並料理献立

禁物 雁肉 思邈云此月食へハ神を破る 又礼記に此月食へハ人に益あらず○蓴菜 李廷云七月蠧虫多く着く此を食へハ霍乱せしむ

好物 胡麻を食ふべし よく内を潤すなり 摂生論に出なり

料理

汁 塩ぶり もみうり とろろゆ
ほし略 めうど

あらめ 岩たけ さんせう
やたらづけ 午房ささがき
へぎしいたけ 杙ゆの皮

いわがい 苑さうど

清汁 ひやしさすご 煮てわ 五布杜丈
うるめ ゑらび きつくすくもしきび
まそ貝 あえし うどめ
杙こぜ 皮ひき 葉せんねぎ こせう
ちやうろぎ こせう
膾
せいご・あかがい・
こみちらん くりかのめ
あらび・大こん もう・しそうが

煮りの

差味

和會物

吸物

精進

汁

膾

清汁

差味（さしみ）
白うり　いなさけ　ゆで
茗の葉みやうが　せうれんぐ　ゆりね
大こん・ぎいき　ゑるこけ　いり酒
ひげこ・なまこ　なす　からしすそど
るりびかんてん　まるつび　ふ　しいたけ
いとこんにやく　うこぎうめん　ちりめんうり　いり酒

煮物（にもの）
やきとうふあげ　まつたけ　栗付うぶう
土筆子　ちろぐわい　ふきこぼく
かもなんきん　いろ切麩・まつたけ　うすみどりせうが
新山いも・青豆　枇杷　ふどあんかけ
根いも　ゆりね　とさび
志めじ　にんじん　光りけ
ぜんまい　ゆばし　ひらたけ

和會物（あへもの）
ささげ・あき豆　まつたけ　せうがそへ　あくあへ
ぎいきご　ごまみそ　あへ
浄新ずいき　ゆりね　ごまみそ
きんかん　光りけ　柚みそあへ
あげふ　さやまめ　たでなへ
ひとくちなすび　えうが・くるみ　ごまあへ
くりまつたけ　白ごまみそあへ

日本歳時記拾遺　全　三冊
先年貝原先生作の日本歳時記全四冊世に行はれ右家の紀歳と月令博物筌を参考しれたる事あれと尚俗の事を洩し四季時紀節分並の事を雅俗の好事を加へて拾遺と号して以中以土用の事を拾遺したるものなり、おもしろく記し俳諧の作りとす

博物筌　小本　合本　一冊
此本は神社佛閣人物草木魚鳥そのほか天地の間の事を委しく出し其ほか天の事は雷。猪子。其外の事は俳諧の季あるもイロハ分にて(イ)の部を見るよう

神佛祭礼記　小本　一冊
日本国中神社の祭礼佛家の縁日天神宮。出雲大社。人の事は医者の家々の神体の形状並びに古来奥義を行われる事小雅し出し神社は神体を記し故にそれを方々に悉く知らせとのなりを、諸国の寺まで集め故に来歴とをよまずみがる記入あり